



電話がなった。

受話器をとったのは塔南交通営業部の林だった。

「はい、塔南交通です」

「もしもし、隣のマンションの203号室の田中です。京都駅までいきたいのですが...」

「いえ、ここではタクシーの受付をしていません。無線配車はXXXのXXXXです」

「え!窓から見ますとタクシーも運転手さんもいっぱいおられますが?それに無線センターではどこの会社のタクシーがくるかもわかりませんし、年寄りですからお隣さんなら安心と思って...」

「ですから、タクシーを呼ばれるなら無線センターに...」

「.....」

このような電話は日に十数本あるが、断る理由はただ管理職が事務所からでて運転手を探すのがめんどくさいの一言だった。

この平成大不況でタクシーは、京都の街を二時間ほど流しても客は見つからない、やむなく駅などで客待ちをするがこれも駅からはみ出して警察の取り締まりがあれば即罰金となる。運よく駅の構内で一時間ほど待っても一回の平均単価は約九百円ぐらいしかない。食事も豚丼を買って客待ちの時間に食べて一日十時間以上働いても一日の売り上げは一万円前後しかない。日当にすれば四千円で時給は四百円とおよそ世間では信じられないほどの給料で生活しているのがこの塔南交通のタクシー運転手だった。

この塔南交通でも営業部はあった。

営業部長の長山、課長の福岡、係長の林、そして平の赤井の四名だが、世間一般的ないや他のタクシー会社がやっている顧客獲得などの営業活動は創業以来やってこなかった。

この会社が営業活動をしないという不満は約百五十名の運転手に渦巻いていたが、運転手も色々な、それも勝手な営業活動を展開してそれぞれの生活をまもってはいるが...

ある夜勤組の四一五名のグループでは会社の休憩室を半ば占領して酒盛りをはじめていた。もちろん仕事中にはあったが、制服などはまったく無視して全員が思い思いのラフな服装でストーブで酒のあてのサンマを焼いている。冬などは事務所の炊事場にある電子レンジで酒をチンしていた。

この事務所には、二人の事務員が夜勤勤務をしている。もちろん隣にある休憩室での酒盛りや部外者である女性の出入りも知ってはいるがこれを注意する者は誰もいない。

この悪グループのボス格は岡田というが、この岡田の担当車は黒塗りの中型でクラウンの新車をあてがわれていた。普通は昼勤務と夜勤務の二人が交代で乗務するが、この岡田のタクシーは一人乗務で昼夜の区別なく岡田の自家用車として扱われていた。

岡田の携帯電話がなった。

「はい、ありがとうございます、岡田タクシーです」

「まいど一祇園から高槻までなんぼでいってくれる?」

「はいはい、いつも乗っていただいていますから五千円で...」

岡田は飲酒運転でタクシーを走らせるが、メーターはたおさない。その客からもらった五千円全額は岡田の収入になっている。これでは会社に一円も納金できなく給料もゼロになるが、岡田は給料をもらっていた。

その仕組みのカラクリは、岡田がどこからか手に入れた他人名義で紛失届けや無効のクレジットカードを数枚もっていた。塔南交通のクレジットカードシステムは器械で読み取らないで、カードの上に紙を乗せて圧力をかけて印字する方法だった。岡田はそのクレジットカードの紙に二万円とか三万円と書いて会社に提出するが、クレジットカード会社は当然ながら換金はしないのに売り上げとして約半分は岡田に給料として渡していた。

さすが会社もこれを無視できず岡田に注意するのかと思えば、なんとその防衛の手段はなんとクレジットカードの使用禁止にしてしまった。たしかにこれで不正は防げるがこのことによって塔南交通のタクシー利用客はさらに減ってしまった。

.....

尚、この小説に対して京都地裁は掲載するなという命令はない、さらに、このブログに対しての「謝罪広告」も却下しています。また、この再掲載に対してたった一度の抗議も申し入れもありません。本来ならこの記事が嘘なら名誉毀損として刑事告訴しなければならないのは子供でもわかります。で、この1話なんてものは犯罪ですよ。しかし、会社側弁護士は我が社の優秀なドライバーと裁判官の前で絶賛しました。。。このクレジット不正なんてものは事実通りとしてクレジット会社に記録は残っているが...親会社の滋賀交通は不問にしています。

..... 2話

この岡田らの勤務態度は、昭和三十年代のタクシー業界なら当たり前だったが、平成十六年の現在ではどんなタクシー会社でもありえない話になる。塔南交通のタクシー運転手もなぜ?岡田らが社内でやっている常識外れのことが出来るのか誰もが推測していた。この推測は二説流布されていた。

一つは、営業部長の長山と女性業務課長の竹下ができているという説で、この二人がラブホテルから出てきたところを岡田らが見つけて写真に撮って脅迫しているというものだ。

塔南交通の本社は他県にあって従業員も二千名を越える大企業となっていた。社長は本社の社長が兼務している。実質的な塔南交通の責任者は長山営業部長にはなっているが、この長山は朝礼でもボソボソと三言以上は喋れない気の弱い男で、これを裏からコントロールしているのが竹下課長だというのは社内のすべてが知っていた。

営業部長と女性業務課長の机は仲良く並べられている。業務の仕事であるハローワークや社会保険関係の用事で竹下課長が外出する時は、長山が運転して助手席には竹下課長が乗っている。業務以外でもコンビニに弁当やおやつを買いに行くときもいつも二人一緒に、新しく入社した運転手のすべてがああ二人はできていると思うほどの熱々ぶりだった。

だがこの二人ができていてその証拠を握られて脅迫されているのだったら、もう少し遠慮する

はずだと事務所の管理職も運転手も首をかしげていた。

もう一つの説は、この二人が共謀して会社の金を横領しているという説がある。岡田らはこの横領の動かぬ証拠を握っているから普通では考えられない事をして長山部長も竹下課長も岡田らを首にできまいというものだ。

この横領説の方法も二つあると噂されている。一つは、タクシー会社は社員の出入りが激しい職場であってそのために一月分の給料からみなし所得税として十五パーセントを引いている。ところが社員が途中退職する場合は、そのまま徴収した所得税が残るからこれを着服しているという説がある。

二つ目は、運転手が運転手を会社に紹介して入社すると本社から六万円の紹介料がでる。が、現状はハローワークの紹介や新聞の求人広告を見て入社するが多い。これを誰かが紹介したことにしてこの本社からの六万円の紹介料をネコハバするという手口だ。

だが、もしこれが仮に事実であったとしても岡田らがもう数年間も会社内で酒を飲んでタクシーを走らせてその金を着服しているのを知っていながらも何の手を打てないほどの強力な脅迫の材料にはならないとあるドライバーは考えていた。

そのタクシードライバーは塔南交通に入社して八年目の大月健一だった。大月は四十歳にはなっていたが、この塔南交通のドライバーの平均年齢は五十八、九歳からすれば超若手のドライバーにはなるほど京都のタクシー運転手は高齢化していた。

..... 3話

塔南交通の女帝こと竹下業務課長はこの会社の責任者である長山営業部長を陰で操っていることは先に述べたが、この竹下は金の出入りも人事権まで握っていた。この女ににらまれたら最後で次々のいやがらせといじめで会社を去らなければならない。

事務所の管理職は十二名で、長山、竹下、課長の福岡の三人は勤続二十年以上と長いが、残りの九名の勤続は係長の林でもまだ二年十ヶ月しかない。ある時、事務所の欠員がでたのでドライバーであった五十五歳の塚本茂が営業部長の命令で事務所営業部に配属された。ところが竹下業務課長はこれが気に入らないと塚本をこっぴどく言葉の暴力でいじめていた。

塚本の事務所勤務の初日の朝、営業部長が席を外すと事務所全員に聞こえる大きな声で、「塚本さん、あんたのことをこの事務所では誰一人歓迎していないのにノコノコ出勤して事務所に座ってられるわね...」

二日目も、

「塚本さん、この今までこの事務所で勤務した人の中であなたが一番物覚えが悪いですねー」

五日目は、朝、事務所に出勤している塚本に車庫のタクシーを指差して、「ん!あんたこんなところで何してんの!早くタクシーに乗りなさい!」

六日目の朝、塚本は出勤したが、これにはさすがの塚本も啞然とした。塚本のデスクの上は片付けられて計算機もない。そして机の下には大きなダンボールとゴミの入ったゴミ袋が置かれて、そこにあった椅子はどっかに持ち去られていた。この日の朝から塚本はいじめに絶えられな

くなくて元のドライバーに戻っていた。

この竹下は塚本が憎いのではなく、そもそも雲助風情がエリート集団であるはずの事務所の管理職になることが耐えられなかった。竹下の年齢は不詳だが、もう肌のたるみから見て誰も六十前とは見ている。この年齢の人達の教育環境では職業的な差別は当然もっているし、また民族的な差別も口にしていることがあったがこれについては後で述べることになります。

竹下が人事権をしきっているからこの会社の管理職にはタクシー経験者がいないことになる。京都には五十数社のタクシー会社があるが、事故系などには警察のOBなどを起用するが、それ以外の管理職のすべてがタクシー経験者を抜擢していることから見てもこの塔南交通の人事は異常なこととなる。

こんな会社でも管理職が一丸となって会社運営をすればなんとかなるものだが、たった十二名で派閥が三つもありもう福岡課長と林係長はなんと三ヶ月も口を聞いていなかった。電話一本取るにしても自分の仕事に関係がなかったら、相手の用件も電話番号も聞かずにただ「係りがおりまへん...」という電話しかできずただでも少ない観光客の予約の仕事もみすみす逃がしていた。

「京都タクシー新聞」は、

<http://pink.ap.teacup.com/kyototaxi/>

「タクシーの掲示板・全国版」は、(この小説のご意見はここにお書きください)

<http://6712.teacup.com/kyotoinari/bbs>

塔南交通の営業部長の長山は、タクシー会社の管理職にタクシー経験者がいないことに何かと不便を感じていた。新入社員や二種養成運転手の教育にはやはり二種免許所有でタクシー経験者でないと実質的な教習はできないし、法律でも最低五日間はタクシー経験者の指導を義務付けられている。

去年の秋にこの会社の若手のドライバー、勝山一郎を長山営業部長と福岡課長が見つめて事務所に入れたが、先の話のように女性業務課長の竹下が女性独特のいやがらせといじめでたった二週間でやめさせてしまった。

その勝山が同僚の大月健一に話をしている。

「大月さん、ここの事務所は異常です!」

「そや、ここは女の腐ったような奴しかない!」

「いや、人間関係というより...私が二週間事務所にいたのが、十一月二十二日からの二週間で京都の紅葉シーズンの真っ最中でどこのタクシー会社も貸切タクシーの予約でいそがしくしている」

「そら~そうだ、どこの会社でも観光が出来る運転手を無線で呼びたくっているほど需要はある...それに京都ではこの二週間が観光の最大の稼ぎ時だ!」

「そう、そうでしょう!ツーリストやホテルは観光タクシーを準備するのに春ごろからしている。ところが大月さん、私のいた二週間にたった一台の予約どころか問い合わせの電話一本なかった...ここが京都のタクシー会社かと驚きました」

「そら~営業部があっても何の営業もしないからだ!」

「し、しかし、それでは運転手の生活が...」

「いや俺も一度そのことを林係長にいったことがある、係長は福岡課長が悪い、課長は長山部長や竹下課長が悪い、その部長や課長は部下が悪いと堂々巡りをしている。ここには運転手の声もタクシーを利用する観光客の声も市民の声も反映されないエグイ会社だ!」

「でもそんなことを百回いってもはじまりませんから、大月さんもこんなアホの会社を当てにしないで大月さんをリーダーに観光部を発足させませんか?」

「.....」

この勝山の提案には大月は即答ができなかった。どこのタクシー会社でも野球部やソフトボール、囲碁将棋部にゴルフクラブもある。ましてや日本最大の観光地のタクシー会社に観光部がないこと事態がそもそも異常だが、大月は過去をふりかえっていた。

たしかにこの塔南交通でも過去には野球部などがあったが、会社は社内の任意団体でもビタ銭一文をだすどころか、会社の営業方針に批判的な団体だとなにかといんねんをつけて解散させてきたいきさつがあった。

今回の観光部でもこちらがどんなすばらしい理屈をつけても会社側、いや竹下課長は会社に対しての不利益団体としか見ないのは目に見えていた。ところがこの観光部を作るという話は社内

中に広がって募集前にはドライバーが十八名も集まっていた。

それを察知した竹下課長は元々犬猿の仲だった林係長に出世話をだしにして上手くまるめこんで林にある命令をしていた。その命令とは「大月を首にしろ!」だった!

林係長は人一倍出世欲の強い男で営業部がありながら、大月が観光部を立ち上げてそこそこ成功をすれば本社は喜ぶが、しかし、自分の立場はなくなるとこの観光部つぶし、いや、大月つぶしの命令を喜んで受けていた。

竹下課長も日頃は、私の目の黒いうちはあの林係長を絶対課長には昇進させないと公言しなから「敵の敵は味方」だと林係長までも上手く利用していた。

・・・・・・・・ 4 話

平成十六年三月十二日午後四時に塔南交通観光部は正式発足された。場所は会社会議室で会社側出席者は、最高責任者の長山営業部長と福岡営業課長、ドライバー側は、大月健一とこの会社のドライバー最古参の岡山彦造だった。この会議で決められたのは次の通りだった。

- 一、塔南交通の確認団体として塔南交通観光部を認める。
- 一、会社側の窓口は、福岡営業課長があたる。
- 一、観光部長は、大月健一とする。
- 一、観光教育担当は、岡山彦造とする。
- 一、諸経費については、福岡営業課長と大月観光部長が協議してきめる。

以上

こうして塔南交通観光部が結成されたが、これをおもしろく思っていない人物が二人いた。竹下業む課長と林営業係長だった。

その五日後の十七日の午後五時ごろ、中江という観光ドライバーが大月に用事があると探し歩いて事務所の中で林係長に、

「観光部長はどこにいったか知りませんか?林係長」

「観光部長?そんなものこの会社にあらへん!」

「何ってまんの大月さんが部長ですよーこれは我が社のドライバー百五十名のすべてが認めています」

「誰が認めても、その会議には俺と竹下課長が出席していないから認めてはいない」

「そんなーアホなー」

その時、事務所に入ってきた大月に中江は、

「部長、部長は観光部長ですねー」

「へえーそうです...なんなら中江さんを観光副部長にしてあげますよーたった今から...」

「いや、さっきから林係長はそんなもん知らんっていつている!」

大月は林係長の目を真正面から見ながら、

「ほな、部長がダメなら、支配人、会長、最高責任者、リーダー、事務局長のどれが林係長はお

好みですかー?」

「そんなことはっていない、俺は観光部そのものを認めていない」

「そんなバカな～部長も課長も認めています」

「俺と竹下課長が入っていない密室の会議そのものが無効だからだ!」

それでも無事に三月二十五日に初の観光部全体会議が開催されている。その中の雑談で、会社内の悪グループの岡田らが会社をどんな手口で脅かしている話がでた。皆それぞれ悪グループとはなんらかの接触がありその話を総合してまとめると次のような推測ができた。

まず岡田らは長山部長と竹下課長二人が共謀した金銭的な不正を見つけてその弱みにつけこんでいた。ある日、悪グループのメンバーが酔っ払って自転車で転んで肋骨を折る怪我をした、それを出勤途中の労災にしてくれとねじこんでいたが、会社は何かの弱みがあることでそれを認めて会社が労災と認めていた。

またある運転手が酒を飲んでタクシーを運転して自損事故を起こして怪我をしたが、それも労災扱いとして認めさせていた。この同じ手口で悪グループが労災申請をせよとせまったが、会社もさすがは少し抵抗したが、

「それなら今までの不正労災申請を当局に訴える、訴えればこの会社ばかりか本社のS交通にも迷惑がかかるがいいか!」と驚かしながらズルズルと不正労災申請を続けてきた、現在も悪グループの一人が労災で入院をしている。

このような不正に対して本社になんとかしてくれと訴えるドライバーもいたことはいたが、なにせその声はこの会社の本社S交通の経理部長で止まってその上の専務や社長には届いていなかった。その理由はいたって簡単でこの経理部長も雲助風情の電話より塔南交通の長山部長と竹下課長を心より信じていたからだ...

..... 6話

林営業係長のいう密室の会議とは自分が入っていない会議のすべてをいっているようだ。会議にも色々あって長山部長と福岡課長だけの会議もあれば、それに竹下業務課長を入れての三人の会議もある。林係長の入る会議とはたった一つだけで運転手を雇用する会議だった。

これも実質的には竹下課長が采配をふるっているから林係長は口出しをできなかった。普通のタクシー会社の採用条件は、まじめに働いてくれるか?そして交通違反などの点数が残っているかで判断をしている。これさえ満たせばただでも運転手不足のタクシー業界ではよっぽどの過去に金銭不正等々の事件がない限りは雇用している。

ところがこの塔南交通では、そんなことは無視して竹下の判断が優先していた。その判断に間違いがあっても後の三人は口だしができなかった。その竹下の判断とは、国籍だった。この国で国籍問題というのは在日朝鮮人や韓国人のことであるが、竹下はこの人達をまず雇用する気はなかった。とここまで書くと竹下らは口を揃えてそんなことはない現に韓国籍の人々も雇用していると反論すると思います。

大月健一観光部長も数年前に韓国籍の友人を会社に紹介していた。大月はまじめな運転手なので雇用は間違いないと信じていたが、会社は雇用を認めなかった。その理由を当時次長だった島本に聞くと、

「島本さん、どうして俺の友人のSを雇用しない...」

「いやーそれが会社の方針もあるしー」

「会社の方針ってなんやー」

「いやーそんなことを口に出しては言えない...」

「ひょっとしてSが韓国人からか...」

「.....」

「次長、今どきそんな差別をしてどうする...」

「いやー俺はそんな差別する気はさらさらない...」

「ほな、誰が...」

「.....」

長い沈黙が続いたあと、島本次長は会社から見て西南の方向に指を差して、

「あそこなら雇ってくれるかも...なんなら紹介するで...」

その西南の方向にはあるタクシー会社があった。そのタクシー会社の社長は噂では韓国籍だと言われていた。大月はこれに腹を立ててこの会話のすべてをワープロで書いて、タクシー協会と京都陸運事務所にFAXで送っていた。

タクシー協会の富山専務理事からの返事は「この問題は各企業の問題であって当協会は指導できる権限はない」という木で鼻をくくった返答しかなかった。

陸運事務所では丁寧に課長と係長が相談に乗ってくれたが現実には塔南交通への指導で終わっている。会社はこれに懲りてかしばらくは韓国籍でも雇っていたが、つい一ヶ月ほど前に東というドライバーがこれも韓国籍の友人を会社に紹介していた。この雇用会議で竹下はあからさまにダメを出していた。この会議に出席していた三人はそれにしたがうしかなかった。

その雇用しないという返事の役割を福岡課長が一手に引き受けていた。福岡は東に何かを言おうとしたが、その前に東が、

「課長、Hさんは前の会社でもトップクラスの成績で、そしておまけにお客さんから感謝の手紙が山ほどきています。それに交通違反もここ二十年無事故無違反ですから...それでいつから出勤ですか?」

「それが、東君...」

「課長、もしH君の国籍が問題なら、私は陸運局からタクシー協会、それに大月観光部長とも相談して大きな問題にします...課長、それでもいいならH君を雇わないでください」

「あ、東君、ちょっと待ってほしい」

福岡課長は、東を待たしたまま長山部長に相談して帰ってきた。そして、

「いやーそんなすばらしい人ならぜひ...」

こうしてH君の雇用は決まったが、後味の悪い話になってしまった。

◎ちなみに、ここに↑に登場しているH君という運転手さんの自家用車を会社構内で止めておいたところ、何者かの手で4本同時にパンクさせられていました。

★～この中の東というドライバーは、伊東良夫という人物です。

この伊東氏はこのように会社と交渉したり親会社の滋賀交通の社長にこの小説と同じような内容の小冊子を郵送していました。

ところがいつのまにか会社に金で心売ったのか？私の不当解雇に深く関与して「解雇通告書」まで作成したのです。ところがそれからすぐに会社から解雇になった不思議な経歴の持ち主になっています。いずれこのカラクリも暴かれるでしょう。

★～私の解雇事件の「解雇通告書」を作成するなどしてこの事件に深く関与していた元京滋交通の運転手の伊東良夫氏が京都個人タクシー協会・楽友支部（観光部）「千鶴タクシー」を開業したということがこのほどわかりました。この伊東氏はMKタクシー、加茂タクシー、京滋交通、それに（？タクシー）でタクシー運転手を10年経験したとして近畿運輸局から個人タクシーの免許を受けています。京滋交通を退職したのが平成16年の5月。この時点で運転歴は8年半になり、残りの1年半は（？タクシー）に乗務したとなります。しかし、加茂タクシーでは乗務員ではなく福祉タクシー部の部長をしていたと私にっていましたからこれは乗務経験にはなりません。しかも京滋交通の勤務も退職まぎわはほとんど欠勤。さらに（？タクシー）が不明。ほんとうに10年の乗務経験があるのか？調べています。

「京都タクシー新聞」は、

<http://pink.ap.teacup.com/kyototaxi/>

「タクシーの掲示板・全国版」は、(この小説のご意見はここにお書きください)

<http://6712.teacup.com/kyotoinari/bbs>

★～小説・タクシーの規制緩和「ペンの暴力」 その7(余談編)～★

この連載小説も七話になりました。

この小説は今読まれていますサイトの他に三つのサイトで発信しています。この合計四つのサイトだけで一日平均約三百回のアクセスがあります。さらにネットマガジンとしても配信、またそろそろヤフー等々の検索サイトでも登録されはじめていますからいずれ数多くの人の目にふれると思います。

現在までに約四十通のご意見メールが届いています。またタクシーの規制緩和の特集をテレビ(テレビ東京系列)で放映されていたとその時のビデオが郵送されてきました。その中で匿名で送られてきたメールの記事を一つ紹介いたします。

神奈川新聞(2004年4月・1日)朝刊・経済面・コラム

「廃業に追いやられた中小のタクシー会社に関する雑感

by 田口 精一郎」から要旨抜粋

「昨年6月の規制緩和以降、経営母体が変わった、即ち、ずばり言って、廃業に追いやられた中小のタクシー会社に共通していることを思いつく ままに、順次挙げると次のようになる。

- ①営業活動の欠如
- ②従業員(事務社員および乗務社員)の教育・研修の欠如
- ③従業員の moral・職業倫理 および morale・志気の不徹底

この3点が特筆されるのは、それぞれが絡み合っているからである。3つの中で、1つでも欠けている企業は、他の2点も欠けている、ということが言える。

3点の全てが欠けているにも拘わらず、優良企業との名声を得ているとか、業績が抜群であるというようなことは、想像し難いことである。測的に言えば、この3点が欠如している中小のタクシー会社は、今後閉鎖に追い込まれる危険性を孕んでいるので、この際、大いに反省を促し、革命的な変革を遂げる努力を期待したい。

世界一のスピードで高齢化社会を迎えている我が国にあって、市民の足として絶対に不可欠であるタクシーをなくす訳には行かない。関係者一同の猛省が待たれるところである。」

.....メールはここまで、

この記事に書いてあることと私の小説の「塔南交通」の現在のことが見事に一致しています。

私がこの会社をこれからどうして立ちなおさせようとしていることもここに書いてあります。「この際、大いに自省を促し、革命的な変革を遂げる努力を期待したい」この言葉通りにドラマは展開していく予定ですが、なんらかの事件性のある妨害も予想されていますから簡単ではないでしょう。

私もそれより前に「タクシーは、こうすれば儲かる!」をあるサイトで発表したものを紹介いたします。

「タクシー会社は、こうすれば儲かる!」

「はじめに」

いうまでもなく、タクシー会社はタクシーに人(乗客)を乗せて運んで儲ける商売です。個人タクシーのように一台のタクシーと一人のドライバーでも営業はできるし、千台で二千人以上のドライバーを雇用しても営業できます。結局のところ一台あたりの営業収益で儲けは決まるシステムになっています。

京都の有名なMKタクシーは、それまで質の悪かったドライバーを徹底教育してからタクシー運賃を下げて京都市民の支持を勝ち取りましたが、それは経営者の並々ならぬ時間とお金と努力がいったことには間違いはありません。ならこれを全国のタクシー会社の経営者がMKタクシーを今から見習ってもそれは無理というものです。

でも、MKタクシーのような軍隊式の徹底教育ではなくごく普通の一般常識のあるドライバーを育成することはそんなに難しくはありませんから時間もお金もそんなにはかかりません。まず、タクシー会社が確実に儲かる経営方針を持って、それを口が酸っぱくなるほど説明と説得をすれば鯉の一本釣りのごとく社内で埋もれていたすばらしいドライバーが釣り上げられます。もちろんすべてではないので、これらの経営方針を内外に効果的に発表すれば憂愁なドライバーが確保できます。この時点ではせめてドライバーだけでもMKタクシーにおとらないタクシー会社になることには間違いがありません。

さて、優秀なドライバーをまず集める手段となる「儲かる経営方針」なのですが、世間一般的な企業なら儲かるアイデアや企画なんてものは日常茶飯事に追及されるテーマになっています。ところがこのタクシー業界というのは国土交通省の免許制にアグラをかいて四十年になりますから、いざこういう時にはさっぱり知恵が浮かばない構造になっているのです。さりとして他の企業や経営コンサルタントもこの複雑怪奇なタクシー業界の慣習などわかるはずもなくお手上げの状態というのが現実です。

そこで現役のタクシードライバーでありながら作家活動や企画をつづけている私とその「儲かる経営方針」をタクシー会社の関係者に伝授いたしたいと思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・田口精一郎こと伊東良夫氏という人物は、

私が不当解雇される少し前にある人物が、京滋交通の事務所の中で大声で「あんな大塚なんて

、金もないから解雇をちらつかすだけで向こうのほうから謝ってきよる」ということがあった。この話の通りにある日突然解雇があったが、この作戦を朝山昇統括部長が運転手の伊東良夫氏にたのんだか、それとも伊東氏が売り込んだのかはわからない。

しかし、現実には私の解雇通告書はこの伊東良夫氏が書いたと森元丸係長は私の質問に答えています。それではなぜ？親会社の滋賀交通の法律対策部やこの顧問弁護士の清水伸郎氏に相談をしなかったかの私の質問には、朝山部長が「伊東氏は法学部を卒業しているから」と答えています。

この伊東良夫氏というのは下記の小説の中にでてくる「田口精一郎」という人物でこれはウソの記事でこれを書いたのです。随分立派なことが書いてはあるが、一方では私を簡単に解雇してみせるからと大見得をきったが見事に失敗して伊東氏も解雇、そして裁判では会社は解雇を請け負わせたことも忘れて伊東氏をペテン師のごとくこき下ろすのですから同じ穴のムジナになります。

この伊東氏の以前の職場は京都府南部の「〇〇タクシー」で福祉介護タクシーの責任者をしていてと私に話をしています。ところがこの会社は介護料を水増し請求等々の不正をしてしてそれがバれて大きな新聞記事になった会社です。この会社でもおそらく京滋交通のようにマッチポンプを演じていたのだと思いますが、この方面の情報をお待ちしています。尚、この伊東氏は京都個人タクシーの免許を狙ってはいたがタクシー歴が少なくこの辺りが会社との取引に使われたのではないかと私は疑っています。当然ながらこの伊東氏もここを読んでいますからもしこの記事に文句があるなら刑事告訴・告発を堂々としてください。

..... 8話

塔南交通のドライバー大月健一は、営業努力を続けているタクシー会社ならさらに十パーセントの売り上げを増やすことはかなり難しい作業になると見ていたが、この会社のように隣のマンションからのタクシー要請にも応えられないほど営業努力をしていないタクシー会社ならごくごく普通の営業活動をすればたちまち二十一三十パーセントの売り上げ増は簡単だと思っていた。

ごく普通の営業とは、まず地域の顧客から愛されることと観光貸切タクシーの顧客開発であることはいうまでもない。この塔南交通のある地域は吉祥院の南部と上烏羽の北部の準工業地帯になる。中小の工場や民家、そして大型のマンションが林立している。

交通はいたって不便で、JR西大路駅までは徒歩約二十分、近鉄十条駅は約徒歩二十分、市営地下鉄までは徒歩三十分で通勤や買い物で歩くには過酷の距離でもある。市バスもあることはあるが、このいずれの駅にも直通のバスはなく市内から車で近い距離だが陸の孤島になっているからタクシーの需要は市内よりはかなり多い。

大月観光部長は自転車で会社までの十分の距離を通勤していた。途中にはマンモスマンションが五棟ある、ここで毎日見る光景はこのどのマンションの前には他社のタクシーが無線で呼ばれて客を迎えている。さらに大月のタクシー会社の隣のマンションの前にも他社のタクシーが少ない時でも二台、多い時は五台ほどタクシーの乗客がでてくるのを待っている。

我が社のタクシー運転手もこれを毎日目撃している。それをうらめしそうに見ながら空車で京都市内を流すのだが、たった一人の客を乗せるのに二時間以上走らなければならない場合も多々あった。ある運転手は朝の五時に京都駅で客待ちをして乗せたのは七時半で売り上げは六百四十円だと嘆いていた。この毎日のいやな光景を見ているのはドライバーだけではなく、我が社の責任者でもある長山営業部長、福岡課長、林係長、そして女帝の竹下課長も毎日見てはいるが、これに対して何にも感じないほど感覚は麻痺していた。

もう一つの営業活動には観光貸切タクシーがある。これは一時間三千六百円ほどで観光地を案内する仕組みになっている。タクシーが京都市内を流しても駅待ちをしても一時間約千円前後しかならないからこの観光貸切タクシーは京都のタクシー会社のドル箱であり、他の会社はこの観光に最も力を入れなければならない分野だが、塔南交通では秋の観光シーズンの真っ最中でも観光の予約どころか問い合わせの電話一本ないことは先に述べている。

大月はすでに総勢十八名の観光部を立ち上げていた。まず手始めに二種類の観光宣伝チラシを印刷して観光部員が中心で乗客に手渡ししていた。ただ問題はこのチラシを見て観光客が会社に問い合わせや予約の電話があっても事務所の管理職らの協力はそんなに得られない。そこで大月はそのチラシに観光ドライバーの氏名と携帯、自宅の電話番号を書く欄を大きく設けて、ドライバーが直接営業してほしいと訴えていた。

この名刺チラシを約五百枚配布したころやっと始めて観光貸切タクシーの予約が入った。これには観光部員は喜んで大歓声をあげていたが、竹下課長と林係長の目は冷たく、大月にはこの二人が何かの悪巧みをしているようにも見えた。

..... 9話

タクシー会社は二十四時間営業のため深夜でも管理職も交代で夜勤をしている。これは深夜客とのトラブルや交通事故などがあれば現場へ急行しなければならないからだ、何もなければ一人が四時間ずつの仮眠をとっている。もちろん純然たる就業時間中で酒などを飲むことは厳重に禁じられている。

林係長もこの深夜勤務に月二―三回はついている。この男は鹿児島生まれで焼酎を毎日浴びるほど飲んでからこの夜勤の日でも他の事務員やドライバーに見つからないようにコップ二杯ほど飲んで仮眠をとっていた。

この林係長は大月らの観光部をよく思っていなかったことと、竹下課長からの命令で「大月に首にせよ!」の任務ももっていた。四月の一週の日勤の日には林はあることを考えて塔南交通の運転

手休憩室に入っていった。そこには岡田らの悪グループ四名と岡田の彼女が楽しく酒盛りをしていた。

タクシー会社の管理職が自分の会社のタクシー運転手が勤務中に堂々と酒を飲んでいるのを目の前で目撃しているのだから当然のごとく注意どころか、たちまち懲戒解雇しなければならないのは小学生の低学年でもわかるモラルだった。

岡田は林係長が入ってきたことを別に驚いた様子は見せずに、彼女に目で合図を送っている。するとその女は冷蔵庫から林がいつも夜勤の仮眠の前に飲んでいた同じラベルの芋焼酎の小瓶を出して手際よくお湯割りを作っている。

岡田はそれを見ながら、「林係長のいつも飲んでいる焼酎を探すのに苦労しましたよー」とニヤニヤ笑っているが、林は、

「お、岡田さん、どうしてそれを知っている!」

「そんなもの...俺たちも飲んでいるのだから林係長のことは批判はしない、それに林係長は今から仮眠だから別に何を飲もうと関係はない」

「し、しかし...」

女は、林係長の分と岡田の分のお湯割りを林の目の前に置いた。岡田は、「ほな、林係長が一日も早く課長に昇進できることをお祈りしてカンバイ!」

林はしかたなく口につけてはいるが、なんか符におちない様子だった。

「林係長、なんかわしに話があるのか...」

「いや、実は...」

「実は、なんやねんー」

「昼勤の大月を首にしたいが、なんかいい知恵はないかと...いやこれは会社の方針で竹下課長も承知している」

「なぬーあのクソババアーも...そんなら何でも聞いてやる」

「なにか?いいアイデア...」

「そやなー大月は昼勤でよく観光をしているらしい。誰でも客から四時間なり六時間分の運賃をもらっても会社には少なく納金をしているからたぶん大月もしているからこの証拠をつかめば公金横領で即、懲戒解雇ができる」

「なるほど!で、どうして...」

「そんなの簡単よ!日報とタコグラフとを照合すればおかしなところはなんぼでもでてくる、それを見つけてデッチ上げでもなんでも首を切ったら良い!」

「そうかー」

「ところで、なんであの観光部を立ち上げた男の首を取るのやー」

「いやーそれはー」

とその時はもう林係長は、三杯目の芋焼酎を飲み干していた。その姿を岡田の女が携帯電話のカメラで撮って、さらに録音されていることを林係長はまったく知らなかった。

「京都タクシー新聞」は、

<http://pink.ap.teacup.com/kyototaxi/>

「タクシーの掲示板・全国版」は、(この小説のご意見はここにお書きください)

<http://6712.teacup.com/kyotoinari/bbs>

★～小説・タクシーの規制緩和「ペンの暴力」 その10～★

林係長は大月の半年分の日報とタコグラフを前に悪グループ指導の方法で大月の不正を探していた。その姿を見ている事務所の管理職らはあれほど嫌っていた竹下業務課長から課長という昇進の餌に食らい付いて我が社創立四十年ではじめて観光部を立ち上げた大月観光部長の首を切るためのあら探しをしている林には別の意味の軽蔑の視線で見ている。

林にして見れば責任者の長山営業部長の金玉を握り、実質的には陰の責任者の竹下の命令だからなにが悪いと半ば開き直って堂々と大月の首切り宣言を誰かとなしに捕まえては、「大月の首を切るから、何か大月の不正や勤務態度を教えてくれ」というから、ドライバーからも猛反発を食っていた。

大月にすればこの醜い林の最後の攻撃は折込済みで、不正どころか客からの苦情等々も彼らの武器になると少々の客の無理難題にも反発せず腋を固めていた。林は三日ほどかけて日報とタコグラフを照合して解読しているが不正など元々ありえないから竹下からの早く「大月の首を取れ!」の目での合図にも応答できないでいた。

一方、大月観光部長は観光部員十八名が一日も早く、せめて同じ規模のタクシー会社並みの給料をもらえる方法を模索していた。大手はもちろんこの塔南交通以外のタクシー会社は京都観光貸切というドル箱の仕事には力を入れて管理職一丸となって商品開発に必死になっている。我が社の管理職のすべてがタクシー経験もなければ観光の問い合わせにも対応できない中では普通の企画では他社に太刀打ちできないと次の企画書を作っていた。

企画書

京都への観光客はリピーターが多いのですが、もうそろそろ飽きられてきています。最近では市内観光から北山杉や比叡山、琵琶湖までも足を延ばしてくれとの要望があります。そこで京都から二時間以内で行けて将来脚光を浴びる観光地を色々探しましたところ、かやぶきの里で有名な「美山」を発見いたしました。

この美山は、年間七十万人の観光客で賑わっていますが、この観光地の最大の欠点は公共交通の足が不便なことです。京都からでは、JRバスに山間部をゆられて、さらに周山で美山町営バスに乗り換えなければなりません。そのバスの本数も一日四本一七本でバス料金も二千数百円もかかるためにここを訪れている観光客は観光バスと自家用車に限られています。

一方、観光客ばかりか美山の市民もこの不便を感じています。京都市内への病院通いや買い物にもこの不便なバスしかない現状もありここに我が社の安いタクシーを走らせば観光客も美山の人達にも喜ばれることは間違いがありません。

我が社の現状

我が社のドライバーは、朝早くから昼食もタクシーの中でしながら九時間も十時間も働いて昼勤務なら平均売り上げ約一万円しかありません。これでは会社も運転手もいずれ共倒れになるのは目に見えています。それにもう一つの課題は平均五十九歳のドライバーの高齢化もあります。あと五年もすればお年寄りばかりの会社になってしまいます。

こんな会社ですから当面は一日平均の売り上げをなんとか上げなければなりません。美山までは普通に走れば「約一万二千元」ほどメーターがでます。時間は市内から約一時間半です、往復しても三時間ですからこれは街を十時間流しているよりも売り上げも上がりなにより高齢者でも無理なく仕事をしていただけます。ですから片道運賃を二時間に設定して七千三百二十円にしていればたとえ片道でも一日平均売り上げの七十三パーセントを三時間で稼げることになります。

さらに、京都から観光客を美山へ、そして美山の市民を京都へ輸送するのですが、これは小型タクシーに四名、中型タクシーに五名乗車乗車でバスよりも安くて便利ですからそのほとんどが往復となります。もし往復が営業努力で定着すれば我が社の売り上げは部分的には四十パーセント増しになります。

観光客にも美山市民にも、そして運転手にも喜ばれて会社も大いに儲かるこのアイデアをどうか我が社の営業部の議題にしていだけることをお願いします。

関連書類・データ等は別紙です。

塔南交通観光部・部長 大月健一

大月観光部長はこの企画書をコピーして管理職十二名、観光部員十八名に配布していた。塔南交通ではこのような企画書なる文書は配布されたことがなく、はじめは面食らっていた観光部員も「そや!これがタクシーの規制緩和や、MKタクシーを百万回批判しても市民の支持は得ない!こうして自力で商品を開拓することが結局、京都のタクシー業界の活性化につながる」と大いにドライバーからは歓迎されたが、管理職からの支持は、長山営業課長と福岡課長だけだった。こうしてこの大月の企画の名前は「新商品開発・美山観光ルート」と名付けられていた。

..... 11話

この平成の大不況でやむをえずタクシードライバーに転職した人は多い。塔南交通でもここ二三年で他業種からの中高年ドライバーを雇用しているが、京都のタクシー業界の古いしきたりで事務所勤務の管理職は運転手よりもエリートで管理職が運転手を指導して働かすという図式ができあがっていた。

元々古くから働いているドライバーも管理職に逆ったら観光などの儲かる仕事を配車してくれないばかりか新車にも乗れないと半ば公然と管理職は運転手よりも偉い人種だと思っていた。

ところが、この管理職より転職組のドライバーのほうが高学歴で企業戦士として数百名の部下を動かし営業活動に経験豊かな人までが入社してきた。大月観光部長が少し考えただけでも、英語や中国語がペラペラの人、一流企業の法律対策部長、企業コンサルタント、老舗百貨店の経理課長、私立高校や塾の講師、旅行業務資格やホームヘルパー二級所持者、ダンスとピアノの先生、中には親の全財産を三年で食い潰した猛者もいた。いずれも、塔南交通の現管理職よりは人生経験も経営感覚も豊富な人ばかりだった。

この人達もなれないタクシー業務を一生懸命覚えて八年から三年たっていた。少し慣れた心の余裕から京都タクシー業界や塔南交通の経営方針に感心を持ってきた。京都では塔南交通のタクシーの屋根についている行灯そのものが不人気で、その行灯のタクシーがきたらタクシーを歩道で待っている客も露骨に知らん顔をしてその後ろの空車に手をあげて乗車することは珍しくなかった。

これは「あのタクシーは」ガラが悪くて、おまけに京都で一番高くて一番サービスが悪いのイメージの印がこの行灯だったからだ。これらのことを真っ先に気が付いたドライバーの東良介は営業部の林係長に、

「我が社の行灯は、先輩ドライバー諸氏の負の遺産でこの行灯を変えなければ我が社の発展はない。ただ、行灯を変えるだけではなしにタクシー会社として普通の営業をしなければ、それにドライバーの教育も…」

「あらら…東さん、あんた何いってんの…私はこの会社の管理職ですよ一何であんたら運転手が会社の営業方針にチャチャを入れるの？」

「し、しかし、あの行灯では運転手が稼げない」

「そこことあらへん、現に月に東さんの倍ほど水揚げを上げている運転手もいますよー」

「しかし、あいつらは一日に十二時間も十四時間も働いていて一ヶ月に二日ほどしか休んでいない…」

「そやけど、水揚げを上げ取るさかい、行灯には関係がない」

「しかし、これは労基法に違反しています。それに我が社の売り上げの上位の人達は、タクシー協会や警察から厳重に注意されている客待ち絶対禁止の場所で営業をしている。それが見つかって去年の十月二十三日には近畿運輸局から十日車の営業停止を受けている。これが恥だとは思わないのか!」

「そんなもの運転手が悪いのや、そこで客待ちしてはいけないと張り紙もしてあるし、会社は一日七時間半以上働けとはいっていない、それで給料が手取り八万円でもそれはあんたらの勝手や!」

東良介はこの林係長との会話にガックリしながらも、その上の竹下課長にさらに同じことを訴えるが…やっぱり答えは同じ上に、

「課長、同じタクシー会社の身内が、会社の発展のためにアイデアを出しても受け付けないのか…」と東は迫るが、竹下課長は、

「な、何一何で、東さんと私が身内なんや一事務所と運転手とは違うのやーなんか間違った考えを持っているの東さん…」

この会話の後すぐに竹下課長は林係長を呼んで、
「いいかー林係長、あの大月も東も同じことを言っているからこれは会社のためにならない」と、林の目をみたが、林もガッテンとうなずいていた。

林係長は大月観光部長の日報やタコグラフでのデッチあげの不正をあきらめて、こんどは大月と東の履歴書に不正がないか、そして前の会社の聞き込みの調査をしていた。

まだこの時点では、大月と東は同じドライバー仲間だか、顔見知り程度で同じ「首切り仲間同士」とは知らなかった。

..... 1 2話

大月観光部長は、この新商品「美山観光ルート」の企画を提案する前にこの会社の責任者である長山営業部長と福岡課長課長の三人でこれからの営業戦略の基本的な考えの意思統一をしていた。

それは、

- 一、従来のタクシーは、こうあるべきという固定観念を捨てる。
- 一、新商品を最低でも十プランは作る。
- 一、塔南交通のブランドイメージの確立を早急にする。
- 一、営業部長と営業課長のリーダーシップの強化。
- 一、社内新聞を発行して会社の営業方針の徹底化。

たったこれだけのことだか、この塔南交通では画期的な出来事になっていた。大月はすでに新商品の開発プランを十通りほどの計画を打ち立てていたが、最初はまず金も手間もかけず、そして早急に実現できる「美山観光ルート」を提案してそれがこの会議で承認されて早速来週の月曜日から着手することになった。

三月二十二日月曜日、大月は仕事の合間に京都陸運事務所を訪れていた。これはなにせ役所でなにかとあとで文句をいわれないようにするためだった。タクシー料金は規制緩和で認可制から許可制になったものの一応お伺いをたてにいった。

大月は旅客の係官に「美山観光ルート」の説明をありのままにしたが、意外にもあっさり許可の承諾を得ていた。

三月二十三日火曜日、午前九時にJR京都駅八条口からタクシーに乗客を乗せずにメーターを倒して美山へと向かっていた。これは美山観光ルートの正確な距離と時間、そしてタクシー料金を知るための試験走行だった。大月のタクシーは、二条城の南側から西へ、天神川から福王寺、高雄の周山街道を走り美山の入り口安掛(あがけ)には十時十五分に着いた。

ここまで一時間十五分でタクシー料金は一万一千円になっていた。これから先の「かやぶきの里」までは約八キロで京都市内からは一時間半もあれば充分だった。

三月二十四日水曜日、地元の新聞、京都日々新聞などにプレスリリース(取材依頼)をしていた。

三月二十五日木曜日、京都日々新聞の取材を長山営業部長とともに受けた。

三月二十六日金曜日、大月は、管理職向けに「美山観光ルート」の受注マニュアルを作って全

員に配布したが、長山と福岡以外の管理職は質問どころかこの受注マニュアルを読む気にもならないようだ。また塔南交通創業四十年ではじめての社内新聞「まるごとうなん」創刊号を発行して全ドライバーに配布したがこちらは反響が予想以上によかった。ちなみにこの「まるごとうなん」のタイトルは長山営業部長が考えたものだった。

三月二十七日土曜日、京都日々新聞の朝刊に大きな見出しと五段ぶち抜きの次の記事が掲載されている。

京都市内と美山町結ぶ

塔南交通、貸切タクシー運行へ

タクシー会社の塔南交通（京都市南区）は4月から、京都市内と京都府美山町を結ぶ貸切送迎タクシーの運行を始める。小型車を4人で利用すれば路線バスを乗り継ぐよりも安く、同社は「かやぶきの里で知られる美山への観光を気軽に楽しんでほしい」とアピールしている。

京都市中心部とかやぶき集落がある美山町北地区や町自然文化村を結ぶ。片道料金は小型車（4人乗り）の場合、時間制料金の2時間分にあたる7320円で、中型車（5人乗り）は8960円。

帰路は日帰り、宿泊を問わず、美山町までの迎え料金は無料。往路、帰路とも予約制で、同町内や周辺の観光には30分につき1830円（小型車）で運行する。

京都市－美山町間の路線バスは、JRバスと町営バスの乗り継ぎが必要で、本数も1日に片道7－4本と少ない。料金はJR京都駅－北地区間で2140円。また、京都旅客自動車協会が窓口となって京都市から同町への往復や観光周遊のタクシーを走らせている。

昨年に美山町を訪れた観光客は約70万人。同町観光協会は「大半は観光バスかマイカーで訪れている。新たなタクシーの参入で、冬場の観光など幅が広がってほしい」と期待する。

塔南交通観光部は「首都圏などから京都に来る観光客を、美山町へ案内したい。買い物や通院で京都市内へでかける美山町の人たちにも利用してほしい」と話している。

「京都タクシー新聞」は、

<http://pink.ap.teacup.com/kyototaxi/>

「タクシーの掲示板・全国版」は、(この小説のご意見はここにお書きください)

<http://6712.teacup.com/kyotoinari/bbs>

★～小説タクシーの規制緩和「ペンの暴力」 その13～★

京都日々新聞の記事の反響は大月観光部長にも聞こえてきた。大月にすれば塔南交通の名前が売れてほんの少しでも観光の仕事が増えれば会社のためになる、会社のためになることなら大月に首にしようと企んでいる竹下課長も林係長もそこは大人になって電話での問い合わせや予約の対応ぐらいは出来ると思ってはいたがそれは甘い考えだった。

塔南交通の朝礼は八時三十分に行われていた。管理職全員が参加するがそれは長くても三分と形だけのものだった。その管理職全員は事前に今日の朝刊に「美山観光」のことが記事になることを知っている、そしてその新聞も会社が購読しているからすぐ読める。それよりなによりこの記事の内容や大きさを一番気にしているのは竹下課長であり林係長であることは間違いはない。

この日の朝礼もいつも通り約一分で終わっている。本来ならば目の前に置かれている新聞の記事のことが雑談であれ訓示であろうがこの重大ニュースにふれることが当たり前だとは思うが、この「美山観光ルート」を推進してきた営業部長も課長もこの事務所の重い空気を知ってついには朝礼でさえ一言も発言ができなかった。

長山部長は、その新聞の記事を切り取り応接室の奥にあるコピー機で管理職全員の分を印刷しようとセットはしたものの手が止まっていた。そこに福岡課長が青い顔で入ってきた、二人はそのまま応接室に座りこんでしまった。

「課長、この大きな記事だから問い合わせの電話が殺到するだろうが...」

「部長、私もそのことが気になって...」

「私は、この記事を見た本社の社長からお褒めの言葉をいただいて今日は本社に報告に行く」

「部長、私も今から事故の示談が二つ入っている、それに午後も用事があります」

「どや、大月君を無線で呼んでしばらく事務所に入ってもらったら？」

「それが...あの竹下と林が大月に対して陰険ないじめをすることは目に見えていますから、そんな酷なこともいえないし...」

この会議の最中も美山の問い合わせの電話があった。

「もしもし、来週の日曜日に美山の予約ができるでしょうか？」

「はあー美山ですか...それはまだ...」

「えっ!でも今朝の新聞に載っていましたよー」

「いや、運転手のすべてがこんな安いものいややというてまんねん」

「そんなーでも、美山の往復とそれに観光もするから二万円ほどかかります!」

「いや、とりあえず今日は係りがおりまへんで...」

「そしたら、こちらに電話をください。電話はXXXのXXXXXの山家です」

やむなく林係長はメモをしたが、その紙切れを福岡課長の机になんの重しもしないで置いたか

らドアが開けば事務所に外の風が入ってそのメモは吹き飛ばされていた。それを竹下課長がわざと踏んづけて「あら!ゴミが!」といってそれを汚らしくつまんでゴミ箱へポイ!この二人の絶妙なる連携プレーに他の管理職は啞然としているがこの二人には逆らえずこれと同じような電話対応し
かできなかった。

ところが偶然この二人が外出している時にある若手の管理職が電話をとった。このAさんは二人
がいないのでつい気を許して普通の会話で対応したところ普通に美山観光の予約第一号が入って
しまった。これにはAさん、ビックリしてしまってオタオタしているところに古参のBさんが、
「Aさん、いいよ...仕事が入ることは目出度いことだ、おれが間違っ
て受注してしまったと竹下課長にあやまるから...」

この美山観光の予約第一号のニュースは観光部員どころか全社のドライバーが喜んでいたが、
竹下と林は地団駄を踏んで悔しがっていた。このころから犬猿の仲だった竹下と林がそろって外
出するようになっていた、それは大月と東を首にするための密談であったが、皮肉にもその外出
の数に正比例するように美山観光の予約が入っていた。

..... 14話

塔南交通は創業四十年を越えてはいたが、京都の観光関連業界のツーリストやホテルからは観
光貸切タクシーなどは問い合わせなどないほど忘れられていた。そんなタクシー会社に観光部を
立ち上げて観光部員を募り観光の仕事を確認するということは至難の技であった。

そこで大月観光部長は、自前のパソコンに「塔南交通のホームページ」を立ち上げて全国から
の観光客の誘致を試していた。それがかなりの反響になり北海道から九州までの観光客をゲット
していた。それを塔南交通の観光部のメンバーに配車していた。それを良く思っていなかった林
係長が、どこかでこの大月のホームページを見てイチャモンを付けてきた。

「大月さん、あんたのホームページを拝見させていただきました」

「はい、ありがとうございます。おかげでポチポチ貸切が入っています」

「ところで、観光部長は大月と書いてあったが誰の許可をもらった」

「それは、三月十二日の幹部会で決まりました。私が観光部長になって私のホームページに塔南
交通の宣伝をするということは我が社の最高責任者の長山部長も認証済みで、長山部長の奥さん
からもホームページをみたとお礼の電話がありました」

「いや、その会議に竹下課長も俺も入っていないから認められない」

「そんなことをいっても...」

「それに、部長とはなんだ...これを読んだら本当の部長と思う」

「いやいや、会社の野球部だって野球部長と呼んでいます、それに近所のKタクシーなどは観光会
という名前で会長です。なんなら代表でもリーダーでもいいですが...まずは林係長にとやかくい
われる筋合いはないからこれを認めた長山部長にいつてください」

そこに長山部長が外出から帰ってきて、大月に、

「観光部長!ちょっと話が...」

といいながら応接室に手招きをしている。

この林と大月の会話を聞いて頭にきた竹下課長も林を呼んで密談をしている。

「課長、あんでいいのですか...」

「なんで運転手を部長と呼ばなければならない...長山部長も長山部長だわーもう一本当に頭にくるー」

「なんか、いい方法が...」

「そや、本社の経理部長に電話します」

「経理部長?」

「そう、あの経理部長は県庁あがりの堅物だから...こんなんは大嫌いなはず...それに、社長のお目付け役だから経理部長から社長に言ってもらって、あの大月と東の首を切ってやる!」

と、いいながら本当に電話していた。

大月は勤務を終えて家に着くのと同時に長山部長から電話があった。

「お、大月君、たった今本社の経理部長から電話があって、大月君の作ってくれたホームページを消せとって来た」

「えっ!なんで...」

「いや、意味はよくわからんが、君が観光部長と書いたのを経理部長が偶然見たようで、部長というのは本社の社長が決めるものであって、わしが認めたとのおかしいと怒っていた」

「ぶ、部長...あれは社内の任意団体の意味で...」

「し、しかし、本社の指示は絶対だ!そうしなければ君の首を切ると経理部長はいつている」

「それにしても、なんであのいそがしい本社の役員が俺のホームページをチェックするのかわからん?」

「いや、そこんところはー」

「部長、あの竹下課長と林係長の工作ですよー」

「し、しかし、いまさらそんなことをいっても...」

「わかりました。とりあえず美山観光と京都観光のホームページを今すぐ消します」

「す、すまん...」

こうしたいきさつは社員全員に広がるにはたいした時間はかからなかった。これに対して憤りを感じていた東良介は、塔南交通の現状を本社の社長に知ってもらいとなれないパソコンに向かって「直訴」の書面を作っていた。

..... 15話(余談編)

塔南交通の親会社のS交通の役員で経理部長を上手くたらしこんだ竹下課長と林係長は、当然ながら大月観光部長が首になると思ってはいたが、大月のホームページから美山観光と京都観光のページを消却することで解決していた。これまでこの二つのページには合計一日約三百回のアクセスがあったがこれを消却するということは会社に大損害を及ぼしているかの意味はこの三人

には理解ができなかった。

この大月のホームページの中には、この観光の他にもコラムや小説などの作品が約三百ほど掲載されていた。その中に「MKタクシー関連コラム」もあった。それを読んだ本社の経理部長は、またまた逆上して塔南交通の長山部長に電話をかけた。

「長山君、君とこの大月の書いたコラムにMKタクシーの批判もある。もしMKタクシーが我が社を訴えたらどえらいことになる...」

「し、しかし、あれは私も読みましたが...大月君個人が書いているもので...」

「何をいっているあれは、ペンの暴力だ!」

この小説のタイトルの「ペンの暴力」は、実はこの本社の経理部長の一言で決まってしまったのです。大月は思った、もしこれがペンの暴力なら塔南交通で毎晩のように行われている不良運転手の酒盛りを知らながらタクシーを運転させている管理職はもっとひどい市民への暴力、いや殺人行為ではないかと、まだある、運転手の生活は三十年前のレベルまで下がり、この職場でも生活苦でホームレスや首吊り自殺している現状があるのに営業部は何の営業努力もしないのはこれも暴力ではないかと...

この経理部長が、大月のどのコラムを読んでペンの暴力だと思ったかはわからないが、ここでそのコラムを二つ紹介したい。

「不幸を呼ぶタクシー・MKタクシーご子息の陰険」

先に「幸運を呼ぶ、4ッ葉のクローバー」のタクシーを紹介いたしました。これは京都のタクシー約9500台のうちたった4台だけ、タクシーの屋根についている行灯のマーク（ヤサカグループ1200台のイメージマークは、3ッ葉のクローバーで、そのうち4台）が、4ッ葉になっていてこのタクシーを見ると幸運を呼ぶとかなりのマスコミに取り上げられました。ちなみにこのヤサカと対峙するMKタクシーはハートのマークです。

ところがMKのタクシーなのにハートのマークをわざわざ外して走っているタクシーが10台あります、このタクシーを私は、「不幸を呼ぶタクシー」と命名いたしました。このタクシーは、MKグループの駒タクシーですが、もちろん駒タクシーもこの一員ですから、社員の制服は森英恵デザインの上下一式約6万円（運転手の自己負担らしい）を着て、行灯はハートマークなんです、この駒タクシーの10台（20名）だけは、ハートの行灯も森英恵の制服も無線も装備していないのです。

この駒タクシーの社長は、青木義明氏で義明氏は有名なMKタクシーのオーナーの息子なのです。この二世の相場はたいがい「アホボン」に決まっていますが、この義明氏はこれに「陰険」がプラスされます。この義明氏が気に入らない運転手は、一方的に勤務変更や羽束師営業所に配転となります、つまり、他のMKドライバーへの見せつけの「島送り」になり、この営業所のタクシー10台が「不幸なタクシー」になります。

この島送り営業所とは見てビックリ！聞いてビックリ！で、なんと、水もない、電気もない、

電話もない、車庫には屋根どころか地面は地道（山土）で雨でも降ればタイヤがスリップして道路に出られなかったの笑い話があります。それでここの労働組合が陸運局に訴えたところ少しは改善しましたが、その陸運局の改善命令に義明氏は、まず水道は元栓からビニールホースを一本引いただけで、朝は凍って水はでません。電気はなんと工事用の投光器で、トイレも工事現場の簡易便所ですから義明氏の陰険さは誰でもわかります。

このMKタクシーと陸運局のバトルは有名で、いずれも陸運局が敗訴しています。MK理論とは、法律でタクシー会社の営業所には水道、電気は必要とあるが、我が営業所には水道も電気もあるから法律には違反していないと言うのが論法です。これを世間ではムチャクチャと言うが馬の耳には念仏でしょう。

ここで私が最も心配するのは、義明氏の取り巻きのチョットわからんが、当該の運転手のリーダー格を傷つけるのではないかということです。昭和40年代の労働争議でこの手の事件の終末はこういうカタチで終わっていることです。今、義明氏のしていることは、この40年代の労働者いじめのモデルをそのまま行っているからです。このような「不幸を呼ぶタクシー」に絶対ならないためにも全国の仲間の支援が必要になります。

「MKタクシーへの恩返し」

注意・この小説は数年後のことです。今京都のタクシードライバーがこれを読まれると私への批判が集中するほど刺激的な内容になっています。しかし、これもまた現実だということをMKさん以外のドライバーに読んでほしいと書きました。

20XX年4月、10数年続いた平成大不況もようやく落ち着き景気の回復は誰の目にも感じられた。280円の牛丼も元の350円で売ると発表されたが、市民からは「長い間の経営努力ごころうさん」と好意的に受け取られていた。

夜の祇園も、好景気の前祝なのか平日でも賑わっている。富永町の高級スナック「赤まんま」のママ美雪は、MKタクシーを電話で呼んでいる。オペレーターの女性が、
「いつもありがとうございます。あいにく今日は込み合って約20分ほどお待ち願っていますが」

「はい、それをお願いします。それにしてもMKさんは繁盛していますネ」
「はい、おかげさまで、4月20日から市内で200台の増車になりますから、それまでよろしくをお願いします」

美雪は、客の桜井に、
「すいません、MKタクシー20分ほどかかりますから、もう一杯何か？もちろん私のオゴリ！」

「ママ、タクシーなら他にもいっぱいあるだろう～」

「はい、でも桜井さんの会社もあの不況で大変だった時に、色々な人に助けてもらったでしょう？」

「そら～こうしてママの店にこられるのも、色々な人の情けで」

「そうでしょう、私たちの商売もあのころは大変だったの。その時にホステスやお客さまを安く、近くでも愛想よくしてもらったから一今さら少し景気が良くなったからってタクシー会社を変えたらそれこそ罰が当たるわ！」

「ホステスさんは毎日タクシーに乗るから、10%は大きい」

「ある雪の日、MKがなかなかこなくて歩いて祇園のMKパーキングのタクシー乗り場に行くと先客が50名ほどいたの、MK社員がドラム缶で火をたいてくれて、皆ドラム缶を囲んで1台空車が帰ってくると歓声を挙げたの。たかだか10%200円ほどのために苦勞している仲間がこんなに多いと感動したわ。この苦勞、今日のことを一生忘れずカンパローと心に誓ったの」

「そうだったのか、MKの値下げは企業のエゴだと思っていた」

「だから、私たち祇園の女もお客さんも景気が回復してもMKに乗り続けるの、いつまでも！だって一緒に苦勞した仲間だもの」

「それは、MKへの恩返し？」

「うん、それもあるけど一私がMKタクシーに乗る時、他の会社のタクシーの運転手から聞こえよがしに「このケチホステス」と言われたの。悔しくて涙が一そのしっぺ返しなの！」

「京都タクシー新聞」は、

<http://pink.ap.teacup.com/kyototaxi/>

「タクシーの掲示板・全国版」は、(この小説のご意見はここにお書きください)

<http://6712.teacup.com/kyotoinari/bbs>

★～小説・タクシーの規制緩和「ペンの暴力」 その16～★

塔南交通の創業四十年以来はじめての観光部創立、大月が企画した「美山観光ルート」も新聞に五段ぶち抜き大きな記事になり最初の「美山観光往復」の仕事の日がきた。

お客様は名古屋の女性のお年寄り二人連れ、大月は曲がりくねった山道ではお年寄りには辛かろうとホームヘルパー二級の資格を持つ東良介を指名していた。

その日の朝、東が出勤するとドライバーから激励とも冷やかしくともとれる挨拶が相次いでいた。

「東さん、美山の初仕事だって...たのむで...お客様を喜ばしてやー」

「もし、これで美山観光が失敗したら、東さんの責任問題になるしーしっかりたのむで...」

「おめでとう...次はわしが行くしー」

東は服装を整えて事務所に入った。

「おはようございますー」

これに対する返事はなく東は目で管理職の数を数えていた。十名がいる、その中には「美山観光ルート」を推進してくれた長山部長と福岡課長もいるがこの会社の女帝の竹下課長に気を使ってこと美山に感ずることはタブーになっていた。さすが福岡課長は東に「気を付けて」と言おうとしたがその瞬間に福岡の口をふさぐように竹下課長は大きな声で林係長にどうでもいいことを話している、林も東が目の前にいるのを無視してバカ笑いをしていた。

東良介のタクシーはこの記念すべきお客様を乗せて「かやぶきの里」美山に向かっていた。東はこの美山は二回目であって、一回目は大月観光部長らと研修にきていた。芦生原生林から大野ダムまでじっくり時間かけていたからもう美山観光に自信があったが、それよりなにより東観光ドライバーのもてなしの心とお年寄りへのやさしさでお客様を大満足させていた。

このあくる日にこのお客様から会社にお礼の電話が入った。電話をとったのは営業部の赤井で、この電話の内容は事務所の誰にも報告せず東に事務所の外で内緒ごとのように話をしている。

さらに数日後、このお客様から和紙で作ったハガキに丁寧なお礼の言葉が書かれていた。それを発見したのは林係長でそれも誰にも言わずに東に無言で手渡していた。

東はその場で読み、林係長に、

「林係長、このハガキを長山部長や福岡課長に見せていただきましたか？」

「なんでや...」

「だってこれは会社として名誉な喜びでもあるし、これを発表して社員一同で喜ぶのが本当でしょう...もちろんこんないいことばかりでなしに苦情も含めて発表することが社員の励みにもなる」

「東さん、あんた何を考えているのやーそのハガキの宛先はあんたや...だから黙って持って帰ったらしいのやー」

「しかし、この前のお礼の電話もこれも会社の責任者が知らないのはおかしい!」

「そんなことはこの会社はしない...」

東はこの時、思った。たしかに長山部長も福岡課長も美山観光を推進してくれたし観光部も否定をしていない。しかし、この会社の方針を真っ向から否定している竹下課長や林係長になんの注意もリーダーシップもとれない責任者なんてあってもいいのかもしれないと...

..... 17話

東良介は、塔南交通の責任者である長山営業部長のリーダーシップのなさに愕然としていた。この怒りを会社内で半ば公然と行われている不正の数々の一部始終を書いてそれを小冊子にして親会社のS交通社長、田神太郎の山科の自宅に配達証明付きで郵送していた。その手紙を受け取ったという証明ハガキが東の手元に届いたのが五月四日であった。

大月観光部長は、この東の「直訴大作戦」の成功率は半々だと見ていた。仮にこの直訴を社長が読んだとしても、直接的に田神社長が動くかという問題があるからだ。例によって腹心の経理部長にもし丸投げしていれば経理部長は、塔南交通の長山と竹下を本社に呼び事情聴衆になることにはなるが、なにせこの女帝は歳こそ喰っているが長山の金玉を握り離さない特技を持っている。県庁上がりのお堅い人物なんぞは朝飯前に攻略できる自信があったからだ。

京都にはS交通グループ傘下のタクシー会社は三社ある。このうちの二社、つまり塔南交通とトキタタクシーは、事実上の兄弟会社であった。この二社とも社長は田神太郎で、それぞれの会社は部長が責任者となっている。塔南交通は長山営業部長、トキタタクシーは棚橋統括部長となっている。

この棚橋の肩書き「統括部長」とは、本社サイドからみればトキタタクシーと塔南交通二社を統括する最高責任者となっているはずであった。つまり、これは塔南交通よりトキタタクシーが格式は上で、長山よりも棚橋のほうが同じ部長でも格が上になることになる。

このトキタタクシーもかつては塔南交通のように荒れほうだいであった。約八年前に当時労働組合の委員長をしていた棚橋を会社は一気に課長待遇として管理職に抜擢していた。この理由は棚橋の持ち前の正義感とリーダーシップの強さが買われたことだと大月は思っていた。

現にこのトキタタクシーでは、社内での飲酒、タクシーの飲酒運転、社内暴力、バクチ、タクシーのお持ち帰り等々の反社会的行為は棚橋のリーダーシップで社内から一掃していたが、ことう営業面になるとなにもしていないというのが現状だった。

塔南交通の「美山観光ルート」のことが新聞の記事になった日に棚橋は塔南交通まで祝福の挨拶にきている。

「おめでとう、そうかやっぱり、これからは営業活動を強化しないとタクシー業界では生きていけない。これは刺激になるはーうちも早急になにかをやるは...ハハハ」といいながら、美山観

光ルートの資料を持って帰っていった。

人間とは不思議なもので、ライバル会社のことが大きく新聞に報道されるとそれを自分のことのように喜び、そこから学習をし自分のものにする人間と、「ねたみ・しっと」でこの新聞の記事のことを絶対成功させないと工作をするもの、さらにエスカレートして大月や東の首を切ろうとしている人間がいる。大月は同じ日の同じ時間、同じ場所でこの二種類の人間がいることを発見していた。

この統括部長には長山も竹下も塔南交通がかつてのトキタタクシーのような荒れ放題の会社だとは報告をしていなかった。棚橋もそんなことには気づかず営業面ではこの美山観光一つとってもトキタタクシーよりもすばらしいタクシー会社だと錯覚していた。

・・・・・・・・補足

この小説にでてくる東良介とはここでは正義の面を見せているが、その後、朝山昇営業部長に取り入り私の解雇を請負った人物である。この時はまだ滋賀交通の顧問弁護士は介在せずこの東良介こと伊東良夫氏に金かまたは別のことへの便宜の条件で丸投げをしてしまった！...伊東氏は元和歌山県庁の職員で有名大学の法学部出身というふれこみが利いたのであろうか？

ところが私の解雇も伊東氏が書いた解雇通告書なるものの脅しに屈せず私がこれに対して毅然と戦うことを表明したことにより挫折して伊東氏を解雇したが、ここはなんらかの金もしくは個人タクシーの経歴等々の偽装書類作成の見返りで手打ちをしたと私は推測してここに何回も書いてはいるが、これに対して伊東氏は私に対しての抗議等々などは一度もない。

この解雇事件の前日の夜、伊東氏から電話があり、その電話口で伊東氏が書いたばかりの解雇通告書を読み上げていた。そして「悪いようにはしないから、金で解決しないかの」裏取引とも取れる発言があったが、これに対して私はキッパリ断ったことからこの事件が泥沼になった...そして朝山営業部長は滋賀交通本社に泣きついたのが現実だ！...そして裁判の証言では朝山部長も森元丸係長も黒いサギを白いという大嘘の証言をしたのだ！

..... 18話

今から半年ほど前のこと塔南交通に「薩長同盟」が結成されていた。とある居酒屋に入社二年少して鹿児島出身の林営業係長、入社一年目で山口県出身の滝口、そして試用期間が過ぎたばかりの赤井の三人が密談していた。

この薩長連合の目的は、滑稽な話だが後で活躍する大月観光部長と東良介が問題にしていた、会社の営業努力不足と悪グループの一掃というテーマが同じだったことがおもしろい。そして手法も竹下連合(竹下、長山、福岡)の悪事を書いてS交通本社の社長に「直訴」というのも同じだからなおおもしろい。ただ違うのは、薩長連合はこれを機会にしてこの三人を首にして後釜に

責任者の部長は林が、滝口は課長に赤井は係長になるという超スペタクルシナリオストーリードラマを描いていたということだ。

林と滝口は元々仲が良かったが、迷惑なのは営業部の上司に無理矢理誘われた赤井だった。赤井は五十四歳の時に勤めていた倉庫会社のリストラに合って職を失っていた。失業保険が切れ月、三十五回目の面接でやっとこの塔南交通に拾われている。

この赤井もサラリーマンが長いから社内出世争いや派閥争いに巻き込まれた経験もあったが、まだ二年目の異業種からのトラバニュー組でタクシー業界のイロハも知らない林係長が語る壮大なシナリオの実現なんてまだ十年早いと思っていた。この時に赤井はたしかに竹下連合は頭が悪いが、この林係長よりは福岡課長のほうが信頼がおけると福岡課長にこの「薩長同盟」のことを打ち明けていた。

これを赤井から聞いた福岡は即日、長山と竹下の三人で緊急会議を開いていた。竹下は、「何をちょこざいな!この三人合わせれば勤続年数は百年になる。それをたかだか三人合わせても三年と三ヶ月しかない輩が私達三人の首を切るとはチャンチャラおかしいわー裏切った赤井を除くこの「薩長同盟」の二人は一生飼い殺しをしてやる。私の目の黒いうちは絶対に昇給も昇進もさせない!」といきまいていた。

さて時は現在、塔南交通の責任者の長山営業部長は東良介のS交通社長への「直訴」を機会になにもかもやる気をなくしていた。長山にすればもうそろそろ引退をして大月が開発した「美山」にでも家を買って夫婦仲良く暮らそうかなと思っても不思議でない歳になっていた。

その長山の後継者は福岡課長だと決めてもう本社の了解はとってあった。これについては竹下課長も了解済みでいずれにしても竹下は福岡を長山のようにコントロールする自信はあった。

この「長山引退、新部長は福岡」のニュースは社内中を駆け回ったが、一番ショックだったのが「薩長同盟」の林係長だった。これまでこうならないように福岡課長の仕事の足を引っ張ってきた。あの「美山観光ルート」や大月観光部を強力に妨害したのは決して大月が憎いのではなく、福岡課長の成果になるのが気に入らず卑怯な手を使っても阻止してきた。そしてその成果で美山観光は足踏みをしている、また観光部については岡山彦造をたらしこんで第二観光部を立ち上げて大月観光部をぶっつぶす作戦の真っ最中だった。

頭を抱えている林係長に、滝口はいった。

「林係長、福岡課長が本当に部長になったらクーデターを起こしましょう」

「クーデター?どうする滝口!」

「あの悪グループのやっていることを陸運局にバラすのです...そうすれば責任は福岡課長が取らなければならない」

「なるほど...そうなれば自動的に次は...」

「京都タクシー新聞」は、

<http://pink.ap.teacup.com/kyototaxi/>

「タクシーの掲示板・全国版」は、(この小説のご意見はここにお書きください)

<http://6712.teacup.com/kyotoinari/bbs>

★～小説・タクシーの規制緩和「ペンの暴力」 その19(余談編)～★

東良介の「直訴」の小冊子は先月の二十九日には塔南交通の親会社のS交通の社長の自宅に届いている。さらに東は追加の文書三通を郵送しているが、塔南交通の責任者の長山部長はなんのアクションを起こしていない。さらにこの文書の内容についても塔南交通の管理職全員に配布しているがこれも無視されている。

この小説もコピーされて管理職全員で回し読みされているが、誰も表だつはアクションを起こしていないという奇々怪々な展開になっている。

この両名が本社の社長や世間に訴えている最大の問題の一つは社内の飲酒行為と飲酒運転があります。五月に入っても四、五名の夜勤ドライバーが連日のように宴会をしています。ある者はそのままタクシーでヤミ営業、またある者はタクシーをそのまま自宅に持って帰り駐車禁止の場所に十二時間以上も放置しています。もちろんこのことは管理職の全員がもう五年以上も承知している事実です。

さて、ここで飲酒運転のタクシーが早朝、新聞配達の青少年や公園の掃除にいくお年寄りらをひき殺したと仮にしましょう。これは当然ながら塔南・S交通の社長で、S県のタクシー協会会長でこんなことは絶対してはいけないと教える自動車教習所を十数社経営している「田神太郎氏」の社会的責任は重大だということがまだわかってはおられません。

☆ここで経営コンサルタント、フリーライターでもある「田口精一郎」氏のお手紙を紹介いたします。少し長いですがお付き合いください。(これは原文のままです)

大塚伊奈利先生の「ペンの暴力」を読んでいます。かく言う私は、交通全般にわたるフリー・ライターです。大塚先生の連続小説は、まことにさわやかに企業管理職の生態を書き表していると感銘を受けて、先の展開を楽しみにしています。ところで、よく似た話を知人から聞きましたので、つい投稿してみたくなりました。

投稿は、これが2度目です。「売文屋」も、たまには商売気抜きの遊びもします。

実は、私の住まいは、京都の大覚寺の近くです。もっとも、月のうちの半分は東京です。さて、その知人は近所の碁仇であり、飲み友達でもあります。彼はM自動車に勤めていて、何とか部長という中間管理職です。その彼が酒を酌み交わしながら、次のような話をしてくれました。

「自社の自動車の欠陥に関する顧客からのクレームが、系列の

各自販会社に目立って寄せら始めたのが、今から3年以上も前の

ことであった。そのことに関して横の連絡網で、互いに情報を交わした結果、その時点で既に5千件を超えていた。その時にすばやく対応して、欠陥を認めて、手当てをしたとしても、各自販会社の支店を入れると、何百ですから、各支店ごとに処理すれば、通常の修理程度の手間で済ん

でいた。しかしながら、総本社の中間管理職は、各自販会社の意見を聞こうとせず、部品の交換をしてそれぞれの個々のオーナーに陳謝しただけであった。

つまり、或る不具合の原因を根元にまでさかのぼって追求すると

いう真面目さがなかったのです。早い時点で、5千件のクレームの原因はナットの締め方にある、というようにメーカー以外の第三者に丸投げしてしまったのです。丸投げの決定は、事務屋がしたことである、と酒を飲みながら、男泣きして、訴える技術屋連中の部下の話は、一生忘れることはない。

かくいう自分も、首を切られることを覚悟の上で、東京の総本社のトップに直訴すれば良かったのに、と後悔している。人間のすることにミスは付き物である。一切の事故は許されない、となれば、航空会社も鉄道会社も成り立たない。問題は、不具合が起きないように、どれ程の努力をしたか。そして、不具合が生じた場合、どのような対応をするか、ということであると思う。こんどのは、部品一つ一つの材質のチェックが甘かったし、その上、対応が間違っていたのである。部品の材質のチェックが甘かったのは、長年にわたる社風の悪い面が集中的に現れたのである。

また、社長を取り巻く管理職の対応が、甘かったのは、机上の学問や経済理論では秀才であるかも知れないが、危機管理の能力は、子供並であった、ということです。他人から手ひどく叱られたことや恥じをかかされたことや惨めな成績であったことなど一度もない人が、危機管理など、勤まる訳がないのである。総本社 of 部長や重役連中は、生のブランディ（生の情報）を水で薄めて薄めて、ブランディの色すら付いていないような飲み物に変えて、報告、というか、飲ませていたようである。事実を知らされていなかった社長も被害者かも知れないが、そんな取り巻きしか持てなかった報いである。

一番の被害者は、亡くなった人。次は、その加害車の運転手。

3番目は、欠陥車を買わされた人。4、5、6がなくて、次は、社員。得をしたのは、ライバル企業。とにかく、不条理なことは、二つ葉の時に摘むことである。そして、すばやく、その責任の所在を明らかにすることである。これが出来ない企業は、必ず、M自動車の二の舞を舞わされることになるであろう。」

酒を酌み交わしながら、一気に語る彼の目から涙がこぼれている

のを見て、企業とは、何と罪深い組織であることか、と改めて考えさせられたものである。

大塚先生、どうか正義を貫いてください。隠れたファンは全国に居ることと思う。先生のような人がまだまだ沢山いれば、この社会も、もう少し住みやすくなるであろうと確信している。季節がら、どうかご自愛の上、偏食せずに、頑張ってください。

5月11日 フリーライター 田口精一郎

・・・小説はここまで↑...だが、これを書いている「田口精一郎」というのはこの小説の「東良介」であり、会社とグルになって私を解雇せよ！そして解雇の下請けをした「伊東良夫氏」

と同一人物だったのです。。。その見返りは金だったのか？それとも個人タクシー申請の書類偽造だったのかは闇の中だが、いずれ私が一生涯をかけて真実を暴いて見せます。

その伊東良夫氏はこのほど個人タクシーの屋号を変えました。新しい屋号は「個人・ロンドンTaxi」というものです。ロンドンタクシー（ロンドンTaxi）といえば紳士の国の紳士のタクシーだが、どうもやってきたことは紳士とはほど遠い人物だったのです。

さらに参考資料として...京都個人タクシー・ロンドンTaxiのHPを載せておきます。

<http://www.kyoto-taxi.net/profile.html>

..... 20話

会社にもそれぞれの社風というがあります。この小説の塔南交通の社風とは運転手は「雲助風情」で、事務所職員はたかが営業部係長でも管理職と自ら名乗り、ドライバーよりは一ランクも二ランクも上の人間だと肩で風を切って歩いています。勤続二十年のベテランドライバーでもたった勤続二年ほどの事務員のほうが偉いと錯覚して何かあると「あいつを首にしてやる!」とほざいても誰も不思議と思わない職場になっていた。

こんな差別的な社風の見本のような話があります。半年ほど前にある運転手が二条城前の京都全日空ホテルから客を乗せたが、その接客態度が悪いとこの京都全日空ホテルから出入り禁止の通達があった。この時にホテルにあやまりにいったのが、長山営業部長と竹下、福岡の両課長の三名だった。

三名はホテルの事務所のソファに座ってあやまってはいたが、全日空側はこれを許さず出入り禁止が確定していた。この帰り道、運転は福岡が助手席には長山部長が、そして後ろの席には竹下課長が乗っている。社用車がホテルからでると同時に竹下は身を乗り出して一気にまくしたてた!

「部長!黒板みましたか!なんや、朝鮮総連〇十周年記念祝賀会や朝鮮関係の会合の予定がいっぱい書いてありました。あれは絶対社長がアッチの人やからうちら日本人がなんぼあやまってもあかんのやわーそれにあのMKタクシーがいっぱい待機してたから...もういいやんこんなホテルの一つや二つ!」

長山は黙ってうなずいていたが、福岡課長はこの竹下の話を苦々しく聞いていた。この福岡は新入社員の入社教育も担当している、新入社員にはこんな差別の実態やこんな話が相手にどんな心の傷をつけるかということに二時間もかけて熱弁をしていたが、この竹下には馬の耳に念仏、いやもしこれを竹下に注意すればあることないことを本社の経理部長に告げ口されるのはわかっていた。それゆえ塔南交通の女帝といわれる由縁だった。

五月十四日(金曜日)の午後二時半ごろ、大月観光部長が車庫でタクシーの手入れをしていると事務所の方からテーブルに何かを叩きつける音が「バンバン!」耳に入って来た。この日は快晴でさ

わやかな風があったのか事務所の窓もドアも開放されていた。大月は急いで事務所のカウンターから奥の応接室の会話を聞いていた。もちろん続々運転手はなにごとかと集まっている。

そして中からは、

「運転手ごときが分をわきまえず、社長に手紙を出すとは一バンバン!少しは分をわきまえろ一バンバン!」

ある運転手の同士の会話が、あちこちで、

「誰や?あのチンピラ口調でわめいてテーブルを叩いているのは!」

「林係長や!それにやられているのは東良介や!」

「東?あの運転手の?なんでやおとなしい人やのにー」

「いま林係長、手紙とっていたけど...あの東は美山観光にいてお客さんからお礼の手紙をもらったのが美山観光を阻止してきた手前林係長が頭にきて東をいじめているのと...」

「ちがう、ちがう、林は東の首を切ろうとしたが、反対に東が本社の社長に直訴して、それで林係長が怒っているのやー」

東良介はこの会社の親会社S交通社長に直訴をしていた。その返事は社長自ら四つの柱にまとめてそれに対する意見を述べていた。その東への返事を塔南交通の責任者である長山部長に託していた。本来ならば長山が東を応接室に呼んで社長からの返事をいうのが礼儀であってそれが社長に対しても忠義にもなるのだから、ところがこの部長にはこの役割をまったく理解せず社長から順位五番目のチンピラ係長に丸投げしたから話がややこしくなっている。

この林係長の書記官として福岡課長がノートを広げて林と東の会話を記録していた。東にすれば相手が記録するなら胸のポケットの録音器のスイッチを入れていた。

この録音器とは多くのドライバーが無線のオペレーターからの指令をテープにとって道に迷えば再生してこれを聞いていたもので特に盗聴しよう意識して持ってはいなかった。

会話時間は、三十四分二十七秒で福岡課長の発言は少し大目にみても一分しかなかった。

★生々しい会話は、二十一話以後になります。お楽しみに!

.....

★会社側弁護士は、この20話の「全日空ホテル事件」と「チンピラ係長」を解雇の理由の大きな柱にしています。

★この竹内登美子業務課長は、この話を私に口汚く自慢気に直接教えていただきました。場所等々は裁判所の証言台でお話することになりますが、そもそもこの小説の20話を読んだ竹内課長は京滋交通の事務所の中で大きな声で「たしか〜この話をしたのはこの事務所の中でも誰と誰しかなかったのに誰が大塚にいったんや〜」と息巻いていたそうです。これはこの話を誰となしにしたということと、私は大塚にこんな話はしていないというゴマカシにしかありません。そもそもなんで私が全日空ホテルの役員室の黒板に書いてあることを知っているのか?

★二つ目の「チンピラ発言」は、東良介氏がこの会社のおかれている事実を社長に手紙で教えたのです。内容はこの小説もこのチンピラと運転手から言われた森元丸係長が社長に直訴しようとしたのとまったく同じです。つまり、この京滋交通のほとんどすべての社員が同じ考えを持っていたことになります。ただ、この森営業係長は「運転手の分際で分をわきまえろと」会社応接室で東良介を座らして、壁に張ってあったポスターをひきちぎり、そのポスターを丸めて机をバンバン叩き約30分間もつるし上げたのですが、その音は事務所どころか車庫まで聞こえてそれを運転手が「誰や、あのチンピラのような奴は」となったのです

★会社はこのようなまともに話できない森係長を擁護して私とこの東良介を解雇してきたのです。

.....

この小説にでてくる東良介とは伊東良夫氏といい、小説の中では正義面をしているが後に朝山昇営業部長、森元丸営業係長と結託して私の解雇を請負った人物です。この伊東氏は元和歌山県庁の職員、のち加茂タクシーでは福祉部長をしていましたが、後にこの加茂タクシーは介護保険不正水増しで検挙されているがこの事件にもなんらかの関わりがあり、この京滋交通でのマッチポンプ役が本性のようです。

..... 21話

新選組が大人気であるが、この時代には相手を殺そうと思えば相手に刃を向ければ相手も刃を抜くからどっちかが討たれなくては決着がつかない。救急車もない輸血もない時代では人の首を取ろうと仕掛けたら即自分も命がけだということを覚悟しなければならない。

時は現在だが、さすが日本刀を振り回して相手の首を取ることは「やくざ」以外ではしない。しかし、日本刀ではなく相手の生活の糧を遮断する企業の首切りというのがある。

塔南交通では、女帝の竹下課長と林係長が共謀して大月観光部長と東良介の首を切ろうとやっきになっていた。当然なにかの因縁を付けての「懲戒解雇」になるが、この懲戒解雇されれば「失業保険」が支給されない。この二人に貯金も財産もあるはずがないから他のタクシー会社に就職しなければならないが、この京都のタクシー業界とは横のつながりが強くてどこの会社の面接を受けようが元の職場に聞き込み調査をしている。

当然この塔南交通にも聞き込みはあるが、これはそのまま大月と東は「懲戒解雇」をしたというのは当たり前の話になる。つまり、竹下と林のやったことはこの二人の人権も生存権も抹殺したといっても過言ではありません。

こうならないために東はS交通の本社に直訴、大月はこうしてネットで小説を発表して自ら防衛をしていた。おかげさまで首にはならなかったものの、だからといって一步間違えれば大変なことになっていたのも事実です。

たしかに竹下と林が首謀したとはいえその計画は事務所の中で堂々に行われ、この会社の責任者でもある長山営業部長もその他の事務職のすべてがこれを見て誰も注意をしなかったのも事実

です。少なくとも最低でもこの竹下と林は二人の生存権を奪おうとしたのだからなにかペナルティーがあってもおかしくはないと東良介も大月健一も思っていた。

しかし、この竹下とチンピラ係長の林はこんなことはおかまいなしで次なる「首切り」の相手を探していた。それは東が録音したテープでも良くわかる。東が林に、

「何の罪のない人間を首にしようとする私の履歴書や日報のアラ探しをしたのは恥と思わないのか？」

「それはおかしい、このことは事務所の人間しか知らないのに...いったい誰に聞いた！」

「まだそんなことをいっている、林係長は恥ないかと聞いている」

「なにをいっている、これは会社の方針だ!それより誰がいったのだ！」

「それを聞いてどうする？」

「そんな会社の秘密を漏らした奴はクビだ！」

この男、林はバカか正直なのか?はたまた無知なのかと東は首をかしげながら次のことを林に聞いている。

「さっきからテーブルをバンバン叩いて怒っているが、あんたかって直訴をしようと計画をした」

「うっ!...あれは...赤井の歓迎会だ！」

「ほう?誰にも秘密にしてたった三人で...それでどんな話をしたの？」

「そらぁ一酒も入っているし会社の悪口や上司の悪口をいうのはしゃーないー」

「上司とは、長山と竹下、それに福岡だろうーその悪口を書いて本社の社長に送る計画のことを直訴というがー」

「な、なにをいっている。俺たちは管理職だ!お前らは運転手だ!その分際で直訴をするのは分をわきまえろと俺はいっているのだ！」

といいながらまた「バンバン!」とテーブルを叩きはじめた。

★この21話では、森元丸係長が私と東良介の首を切るのは会社の方針と述べています。さらにこういう会社の秘密をバラした奴は首だともいっています。しかし、この小説のニュースソースは私が見たり聞いたりした以外はすべて京滋交通のここに登場してくる4人組から私が直接聞いた話を元に書いています。つまり、この会社の秘密をバラした奴は首といっている森係長からの情報もかなり沢山入っています。

★私がこの小説を書く二ヶ月ほど前の平成16年の1月末ごろ、ある公園でトイレ休憩しているところに森係長が偶然通り私のタクシーで約30分ほどお話をしました。その森係長は、「朝山部長はあのおばはん（竹内課長のこと）にベツタリで、宮崎課長になにをいっても物事は解決しない。こんな会社に見切りをつけて、実はあるタクシー会社の事故係に就職が内定している」。私は森係長に「森さん、森さんはまだタクシー会社のことを良く知らないからたとえ他の会社にいっても上手くは立ち回れない。それよりこの会社で営業活動をすればやがてそれが本会社に認

められて営業部長になるのはそんな遠い夢ではない」と励ましていました。

★つまり、私と森係長とはこんな仲でしたから、当時の会社の恥部である不良グループの行動を色々教えていただきました。さらに先にも述べたようにこの小説の情報源のすべてが会社内部の人間からの情報ですから私の裁判での会社側弁護士の言い分の「たとえそれが事実であっても、それをバラするのは解雇に当たる」とすれば、この京滋交通の長山昇営業部長、竹内登美子業務課長、宮崎征四郎営業課長、森元丸営業係長、その他の事務職員のすべてを解雇しなければなりません。しかし、私も含めてこの人達の全員が会社をよくするためにはどうしたらいいかの論議の中での方法論の違いとすればこんな不当解雇なんていうのは滑稽なお話になりまし、私も小説なんて書く必要もなかったのです。

★～小説・タクシーの規制緩和「ペンの暴力」 その22(余談編)～★

この小説のある部分が注目を浴びています。それは「その20」の下記のシーンです。

「部長!黒板みましたか!なんや、朝鮮総連〇十周年記念祝賀会や朝鮮関係の会合の予定がいっぱい書いてありました。あれは絶対社長がアッチの人やからうちら日本人がなんぼあやまってもあかんのやわーそれにあのMKタクシーがいっぱい待機してたから...もういいやんこんなホテルの一つや二つ!」

長山は黙ってうなずいていたが、福岡課長はこの竹下の話を苦々しく聞いていた。この福岡は新入社員の入社教育も担当している、新入社員にはこんな差別の実態やこんな話が相手にどんな心の傷をつけるかということに二時間もかけて熱弁をしていたが、この竹下には馬の耳に念仏、いやもしこれを竹下に注意すればあることないことを本社の経理部長に告げ口されるのはわかっていた。それゆえ塔南交通の女帝といわれる由縁だった。

この舞台は、社用車の中でのたった三名の会話になっています。それなのに私がどうして知ることになった理由については、この三名の中の一人が私に事実をもらしたとしかいいようがありません。

そのもらした犯人捜しで一番疑われるのは福岡課長になります。それは私と福岡課長とは観光部の関係で割りに仲がいいからです。しかし、真実は小説よりも奇々怪々なのです。

このもらした犯人とは本人、つまり竹下課長自らが鬼の首を取ったような感じで私に直接話してくれました。だからといってこの四名だけが知っている秘密ではなく誰にでも自慢気にこの話を披露した形跡があります。おそらく事務所職員のすべて、兄弟会社のトキタタクシーの棚橋統括部長にもいっているとは思いますがこれは私の推測になります。

またこの女帝竹下課長の最大の自慢は、京都の老舗ホテルの「京都都ホテル」で長年キャリアーで働いていたことです。一度のこの女性にどんな教育をしていたのか「京都都ホテル」に聞いて見たいものです。

.....

★私はこの小説の中で、塔南交通の運転手の多くが時給400円程度で働いていると書いています。私自身も京都下労働基準監督署に訴えて過去二年間の最低賃金との差額30万円（要求は70万円）を会社からもらっています。この基準でいくと約140名の運転手の半分×二年分になりますから莫大なお金になります。さらに当然ながら今後もこの最低賃金を守らなければなりませんから会社が立ちいかなるのには目に見えています。

★過去の未払い賃金はともかく、これからは営業努力をしてまた社員教育などを徹底して最低賃金以上の売り上げを上げなければならないのは子供でもわかります。それに対して京滋交通の責任者である朝山昇営業部長も宮崎征四郎営業課長も「わかった！なんとか努力をしよう」と立ち上がるのは当然になります。そしてこの二人は立ち上がったのですからなんら問題のない展開になっています。

★しかし、これをおもしろくおもわない人物（竹内登美子業務課長・森元丸営業係長）が現れたから問題がドロ沼化したのだというのは当の責任者でもある朝山営業部長もわかっています。ですから朝山部長の口から「この問題の原因は私のリーダーシップのなさが原因」と事務職員全員の前で話をしています。

..... 23話

林係長五十七歳という男は、ほんのつい最近まではこの塔南交通では浮いている存在だった。ハローワークからの紹介できた林を面接したのは長山営業部長と福岡課長だった。この二人は大月観光部長に、やっぱりこのタクシー業界はタクシードライバーから事務所に入ってもらわなければ営業一つも出来ないと言った。林の経験も二種免許もない林と赤井を雇ったことをグチっていた。

林から上の上司は三人いるが、この長山と福岡などは林なんぞはまったく当てにしないで営業のことは大月に相談していた。その大月は色々なアイデアを考えて会社に企画書として提案していた。大月にすればこんな事務所勤務よりドライバーのほうが気楽で楽しかった。しかし、このアイデアを実現させようと思えば人手がいると林係長をこのプロジェクトに参加させたいとたのんでいた。

ところが長山部長も福岡課長も竹下課長も林の性格と仕事も満足にできなく屁理屈ばかりをこねることを見越してなかなか首をタテに振らなかった。実は、この小説が生まれるか生まれないかの分岐点はここだったが、大月はまだ林のことをかっていたし信用もしていた。

これが今年の一月から二月ごろのこと、大月はタクシーの仕事を終えると同時に長山と福岡を捕まえては応接室で話し合っていた。

「部長、我が社のドライバーは時給四百円ぐらいで働いているのを知っているでしょう...それよりなにより会社が立ち行かなくなったらそれこそ悲劇だ!」

「いや一大月君、それは本社からもいわれているが...あの林にはそんな難しい仕事は...」

「私が林のことは責任を持ちます。そんなことより、ドライバーがアパートの家賃も払えずホームレスになっています。こんななんにも営業をしない会社ですから、普通のタクシー会社のような普通の営業をすれば、今よりも二十%も三十%も営業成績は上がります」

「しかし...」

「しかしもクソもないでしょう!」

こんな会議を七一八回したがこの二人の幹部はウンとはいわなかった。

一方、大月は林係長を捕まえては、

「林さん、どや、そんなスネていないで新商品の開発を俺と二人でしないか...」

「そやけど一俺はカヤの外に置かれているしー」

「ガタガタ言わないで、俺が林さんのために「檜の大舞台」を作ってやるからこの会社を立て直そう一長山部長と福岡課長との軋轢は水に流して一生懸命仕事をすればまだまだチャンスはある!」

この時点では林は部長と応接室で話ができる身分ではなかった。それが林からすれば「雲助風情」のドライバーの大月が観光部を立ち上げたり、長山部長と時には大激論している姿を見て脅威に感じていた。その脅威とはいずれ大月がこの事務所に入って自分より出世するのではないだろうか...。

この大月のしつこい努力で林係長はなんとか新商品プロジェクトのメンバーに入ることができた。その日は三月一日であった。その日の応接室で大月は大演説をぶっていた。

「私たちは、我が社のドライバー百五十名の生活と権利を守らなければならない。それにはこの四名が一致団結をして営業成績を上げなければならない。林係長もこの一員であって今日からは我が社の大幹部になったつもりで働いてほしい。しかし、長山部長と福岡課長も何かと忙しいから林係長がメインになることは間違いがない。それにこの幹部会議は二週間に一回は必ず開催して営業の進行状況を発表するからこの会議の招集権は林係長が責任を持ってほしい。さらにこの会議の議事録も林係長がやってほしい」

こうして林係長の「檜の大舞台」の「プロジェクトX」はスタートしたが、林係長はこの会社の大幹部になったつもりと言った大月の言葉だけを取って鼻高々になった。そして大月の計画していた新商品の開発にことごとく反対、いや竹下課長と一緒にあって妨害をするようになっていた。その記念すべき幹部会会議もたった一回で空中分解していたから、長山部長が林のプロジェクトチームの参加に反対した意味がやっとわかっていた。

今、大月は思っている。林は俺に感謝しても当然なのにまだ俺の首を切ろうと工作をしている。その上、大月が立ち上げた観光部を分裂させて、竹下課長一林係長一岡山第二観光部代表とタッグを組んでまで自分の出世を狙っている林に同情はしないと誓っていた。

.....

この小説も次回が一部の最終編になりました。こうして多くのアクセスで全国のタクシー関係者にネットで読まれてはいますが、肝心要の京都のドライバーのほとんどがこのネットには縁がなく読まれてはいません。

そこでこの1部～24部の一部総集編までを紙の本にして京都のドライバーに読んでいただくことにしました。もちろん無料配布ですから、本といっても小冊子程度ですが発行いたします。

.....
滋賀交通グループ・京滋交通の不当解雇撤回闘争はまだまだつづいています。参考資料・小説「タクシーの規制緩和・ペンの暴力」...というもので発行は、1000部を予定。滋賀交通グループの京都のドライバー約250名、他社のドライバー、陸運局などの役所、マスコミに配布を予定しています。

.....
..... 24話

S交通グループの塔南交通の兄弟会社でトキタタクシーがある。塔通交通の長山営業部長と竹下課長のおしどり幹部は、この大月と東のことで連日のようにトキタタクシーの棚橋統括部長に指導を仰ぎにきていた。

このトキタタクシーのあるドライバーがこの小説のことをなにげなしにいうと、棚橋は、「もし俺が書かれたら許さない、名誉毀損で訴える。それにあんな大月など就業規則に照らし合わせて首を切る!」といったそうです。これが六月の二十日の話でこの日にも長山と竹下は真剣に棚橋の熱弁指導を受けていた。そして大月は二十一日は休みで、二十二日の朝六時に出勤すると夜勤の事務員から、

「大月さん、部長からの命令で出庫禁止になっています」といわれていた。

大月は夜勤の事務員と喧嘩しても話にならないから家におればなんか会社から連絡があるかと待ったがなしのつづてだった。

今日二十三日に出勤すると、日報板は所定の位置になかったが、こんな事情の知らない最近入社した事務員はわざわざ隠してある私の日報を探し出庫印を押してくれたおかげで仕事はできた。だが、今日の夕方入庫して見ると事務員から、

「大月さん、明日は出庫をストップされています」とメモを見せてくれた。

そのメモには、「大月健一、出庫禁止、日報とキーを回収」とかかれてあった。もちろん大月は明日もいつもの時間に出勤をして出勤簿に印を押して帰ってはくるが、その足で京都下労働基準監督署にいくつもりだった。

塔南交通の竹下も林も二言目には「首を切る!」だったが、実はこの社風といのはトキタタクシーの社風であってそれを指導したのが棚橋でそれを実践しているのが竹下だという図式が出来上がっていた。

先に塔南交通の「民族差別」の問題があった。この民族差別もトキタタクシー社風かと思う事件があったが、先に塔南交通の京都全日空ホテルの差別事件を再掲載いたします。

こんな差別的な社風の見本のような話があります。半年ほど前にある運転手が二条城前の京都全日空ホテルから客を乗せたが、その接客態度が悪いとこの京都全日空ホテルから出入り禁止の通告があった。この時にホテルにあやまりにいったのが、長山営業部長と竹下、福岡の両課長の

三名だった。

三名はホテルの事務所のソファーに座ってあやまってはいたが、全日空側はこれを許さず出入り禁止が確定していた。この帰り道、運転は福岡が助手席には長山部長が、そして後ろの席には竹下課長が乗っている。社用車がホテルからでると同時に竹下は身を乗り出して一気にまくしたてた!

「部長!黒板みましたか!なんや、朝鮮総連〇十周年記念祝賀会や朝鮮関係の会合の予定がいっぱい書いてありました。あれは絶対社長がアッチの人やからうちら日本人がなんぼあやまってもあかんのやわーそれにあのMKタクシーがいっぱい待機してたから...もういいやんこんなホテルの一つや二つ!」

長山は黙ってうなずいていたが、福岡課長はこの竹下の話を苦々しく聞いていた。この福岡は新入社員の入社教育も担当している、新入社員にはこんな差別の実態やこんな話が相手にどんな心の傷をつけるかということに二時間もかけて熱弁をしていたが、この竹下には馬の耳に念仏、いやもしこれを竹下に注意すればあることないことを本社の経理部長に告げ口されるのはわかっていた。それゆえ塔南交通の女帝といわれる由縁だった。

この京都全日空ホテル事件より半年前にS交通本社を巻き込んだ差別事件があった。

トキタタクシーの有田というドライバーが、友人を採用してほしいと棚橋統括部長にたのんでいた。

「部長、私の友人のA君が我が社に入りたいといっています。その人は、売り上げもトップクラスで交通事故や違反もありません」

「そうかー有田君いいよーただし、アッチの人でなかったら!」

有田の紹介したAとは「在日朝鮮人」だったので有田はあきらめたが、なぜか腹の虫がおさまらずに、JR大津駅前にあるS交通の本社に電話をしていた。電話にでたのはS交通の専務で社長の弟の「田神健」だった。有田は田神に、

「私が運転手を紹介しようと棚橋部長に相談をすると、部長は「アッチの人」はいやだといった。アッチとは在日朝鮮人、在日韓国人と私は理解したが、S交通本社の指導か方針か聞きたい」

田神専務はもちろんこれを真っ向から否定して大至急改善をすると有田に約束をしていた。ところがそれから一年以内に竹下の全日空事件、東が紹介した「就職差別事件」と続いてはいたがこれは氷山の一角と大月は見ている。

この小説のはじまりは、タクシー会社の管理職はエリートで運転手は「虫ケラ・雲助風情」、そして運転手上がりの事務員を「忌み嫌い」、さらに運転手が考えた新商品などエリート集団は協力できない。そして全日空事件と差別が続いています。

林がいう「運転手の分際!」でも首を切ったら赤い血がでます。私の首でも赤い血がでます。これを防衛するには「ペンの武器」で対抗するしかなかったことを最後に訴えて第一部の総集編にさせていただきます。

尚、第二部は、明日からのことをリアルタイムに書きます。

(完)

「京都タクシー新聞」は、
<http://pink.ap.teacup.com/kyototaxi/>

「タクシーの掲示板・全国版」は、(この小説のご意見はここにお書きください)
<http://6712.teacup.com/kyotoinari/bbs>

☆～老人と性「タクシー王はスリの大親分だった！前科10犯」～

日本のタクシー業界の風雲児と呼ばれて全国的にも超有名なハートタクシーのオーナー青ちゃんから電話があった。さくらと客とはお互いに呼び捨てにする決まりになっている。

「あら～青ちゃん、今日の新聞にデカデカと・・・会長を引退するんだって？」

「そう、ワシももう80歳になった。後生きても10年・・・」

「何を言っているの、日本一のタクシー会社にしたことで満足しているの？さくらとの約束を忘れたの？」

「さくら何を言っている、アッチの日本一はまだこれからだ！さくらを満足させてはいない！」

「違うの！満足はさくらしているよ。その～最高齢のセックスの日本一よ！」

「そうか～いや、そんなことより、さくらたしか小説の勉強をしていると聞いていたけど～」

「はい、なんとか書いてはネットで発表しています」

「ほなら、ワシの自叙伝を書いたら？」

「でも～青ちゃんの自叙伝は、さくら二冊も持っていますよ！」

「そ、それはタクシー会社を経営する前後から始まっている、むしろワシの人生でおもしろいのは、その前の恥部で、出版されたら絶対大ヒットする」

「青ちゃんの恥部・・・そんなん書いたら青ちゃんが・・・」

「いや、ワシは見た目は派手だけど実は借金王で、さくらには財産を残せないから本のネタを残す、いやさくらに書いてほしい」

京都H交通の女性タクシードライバー「さくら」は、29歳だが持ち前の可愛さと色白美人で年よりはかなり若く見られている。いつからかお年寄り専門のセックスカウンセラーを始めていた。今日の客の青ちゃんと二人で、南禅寺の隠れラブホテルのベッドでさくらは真っ裸でセクシーポーズをとっていた。それを見ながら青ちゃんは話を始めた。

「ワシが立命の法学部に入学したころは学生運動が大流行で、ワシも全学連の闘志としてデモに参加していた。ある日警察官と衝突して逮捕され、運よく執行猶予になったが、その猶予期間中にまた警察官と衝突してワシはゲバ棒で警察官を傷付けた、今度は刑務所行きが確定でそれが怖くて京都駅から車で逃げた。たまたま着いたのがK県のK市だった」

「へえ～青ちゃん、そんな前科があったの？」

「いや、これは序の口で、それで食うに困って地元のやくざの世話になった。その組は「スリ」の元締めでワシはここでスリの修行を始めて2年でその組のナンバーワンの稼ぎ手になった、そこでワシは日本一のスリになろうと思った」

「お～おうおう！青ちゃん、スリだったの？それにしても日本一が好きネ」

「さくらワシはアッチも日本一だと思っている。そのころそのスリの大親分が脳溢血で倒れて死んだ、ワシはまだ23歳でその親分の嫁はんは55歳だったが寝んごろになってその組の二代目

になったが、古手の裏切りで警察に密告されて2年間の刑務所暮らし、出所してみると組は警察に解散さされていた」

「へえ～青ちゃん、こんな話を誰が知っているの？」

「いや誰も、息子たちも親戚も知らない、もうこの世ではさくらだけだ！」

「そんな大事なことを・・・」

「出所してからというのは警察からマークされているのかすることすることすぐに逮捕されて前科は10犯まで...」

「10犯...」

「それからK市では何をしてもだめと無一文で京都に帰って駅前の電柱に張ってあったM石油商会の配達員募集の広告でM石油商会に入った。その会社は従業員5～6名で社長は68歳で妻は64歳だった。ワシはある時その嫁はんをそそのかして犯してしまった。それからは会社の二階の3畳一間の部屋にその嫁はんは酒や食事を運んでくれた。その1年後に社長がポックリあの世に逝った、それからワシが番頭になり店を大きくした」

「へえ～それがあのM石油なのね！でも青ちゃん商売が上手いネ」

「さくらワシは何でも命がけでやる！アッチそうだ！その64歳の嫁はんがワシのチンチンに夢中になるように時には妙薬や女の局部にヒロポンを注射したりして淫乱女になる教育をした」

さくらは青ちゃんの話聞きながらも、青ちゃんの好きなアクロバットセクシーポーズをとってはいるが、肝心のペニスはダラリとお辞儀をしている。

「それから昭和35年にたった10台でタクシー会社を経営して今では1000台を超えている。ワシは今まで金儲けのために女を抱いて利用してきたが、必ずその女にセックスの真髄を教えて感謝されても誰も不幸にはしていない」

「でも何でそんな話をさくらに？」

「ワシの抱いた女は年寄りばかりで嫌々サービスをしていた金のために！しかし、ワシもこの年でさくらにこんなサービスをしてもらえるのはさくらの金儲けだと最初は思っていた。ところがそれは違うと気がついたから、せめてワシの懺悔の意味で・・・さくらの小説のネタにと」

「そう、わかった青ちゃん、ぜひ書かさせていただきます」

それを聞いた青ちゃんのペニスが一気に起き上がった。79歳とはいえ日本一のペニスだと自慢することがわかるほどカタチが良い！とはいってもさくらを抱いて腰を使うほどの体力はないからさくらが上になる。そうして青ちゃんの身体にヨイショとまたがると同時にさくらの秘部も前回のセックスの良さを覚えているのか奥から愛液がさくらの許可なくあふれ出てきた。

「青ちゃん、まだ何のサービスもしていないけどこのまま入れてもいい？何かさくらの奥がジンジンするの・・・」

「さくらいいよ！」

「ありがとう、青ちゃん、さくら思いっきり声を出しても軽蔑しない？」

「なん・・・20分や30分は大丈夫だから、ワシのことはかまわず楽しんで、なにせ日本一やから！」

さくらはいつもサービスする立場だが、いや今も上に乗ってサービスはしているが、なにせ肌が合うのか？ペニスが合うのかさくらは「青ちゃん～ア～イ～、ウッウッウッィィ～日本一のタクシー、日本一のチンチン最高～」と久しぶりにセックスの真髄を楽しんでいた。

★～↑の小説の余談・ある警察OBがこのタクシー会社の渉外担当として入社した。この元刑事は〇県出身でこの話を「青ちゃん」にいうと、青ちゃんは懐かしがって〇県〇市にいたことがあると口をすべらしてしまった。この元刑事は、入社する前には青ちゃんの自伝を読んではいたがどこを探しても〇県のことは書いてはいない。そこで〇県の警察の後輩に違反だが色々調べさせたら↑の小説のようなことが出てきたそうです。

もちろんこの元刑事さん、スリの下で働けないといって辞表をたたきつけたそうです。

★～さくらの客は京都でも有名人が多い。それは財界のサロンで「さくら」から若さをもらった、生きる勇気をもらったと誰もが自慢しているからだ。京都は戦後のベンチャーから一流の会社に育てた経営者が多い、そしてその多くは死に物狂いで商売する傍ら暴力団との繋がりも否定はしない、これは戦後の混乱期の社会背景としてはやむをえないことがあったもわからない。そしてその会社もほとんど息子が二代目社長となって創業者は会長として生きています。その会長の闇の部分は墓場まで持っていくものだが、人間というものは不思議なもので「さくら」の前では懺悔をしてしまう。いや懺悔というよりさくらになにもかも話して楽になって死にたいというのかもわかりません。（伊奈利）

↑この記事は、「京都タクシードライバー・さくら」の一部
<http://p.booklog.jp/book/18483>

音川伊奈利のブログの総合案内

<http://moon.ap.teacup.com/7012/>

「京都タクシー新聞」タクシーのことならなんでもわかる。

<http://pink.ap.teacup.com/kyototaxi/>